

## 教育課題研究

『共に生きる力』を育む「授業づくり（支援のあり方の改善）」

（平成24年度～平成26年度）

# 研 究 の ま と め

（3年次）

平成27年3月

宮崎県立みやざき中央支援学校

# 目 次

I	研究主題	1
II	主題設定の理由	1
III	「共に生きる力」について	2
1	「共に生きる力」の構造	3
2	みやざき中央支援学校におけるキャリア教育	4
IV	研究の仮説	5
V	研究の組織	5
VI	研究の方法	6
VII	研究計画	8
VIII	研究・研修の経過	9
IX	研究の実際	
1	小学部研究班	1 1
2	中学部研究班	2 5
3	高等部研究班	3 8
4	寄宿舎研究班	6 2
X	研究のまとめと今後の課題	7 0

## I 研究主題

『共に生きる力』を育む「授業づくり（支援のあり方の改善）」

## II 主題設定の理由

本校では、児童生徒の卒業後の自立と社会参加を目指して、自ら学び、心豊かでたくましく生きる児童生徒の育成を目指している。本校の児童生徒は、児童生徒同士、教職員、保護者、あるいは地域社会など彼らを取り巻く様々な人々とのつながりの中で共に生活している。児童生徒が今を、そして将来を生きていく上で、このつながりは欠かすことのできないものである。その中で、児童生徒が関わる人々とお互いを正しく理解し、共に助け合い、励まし合い、支え合ってみんなで生きていくこと、そして自分らしさを出しながら主体的に社会参加し心豊かに生きていくことができるために、本校では児童生徒のライフステージと周りの環境とのかかわりに必要な力として「共に生きる力」を定めている。

「共に生きる力」は、①健康体力②身近生活力③余暇を楽しむ力④コミュニケーション能力⑤自己選択、決定力⑥働く力⑦経済生活への参加力⑧その他、の8つからなっており、本校におけるキャリア教育の基礎となるとともに本校の教育理念として掲げられているものである。

近年、本校では在籍する児童生徒の障がいの重度化・多様化への対応が課題の一つであり、教育課程の見直しや授業の改善の必要性も叫ばれている。そこで、平成24年度から3カ年にわたって『共に生きる力』を育む「授業づくり」（ただし、後述の寄宿舎研究班においては、「授業づくり」を「支援の在り方の改善」と読み替えて実施する。）に各研究班において取り組むことにした。「授業づくり」とは、授業の計画から実践までを広く捉えることとし、より実践的な取組を目指した。「授業づくり」は学校全体で取り組むことができ、また研究班ごとの課題にも対応できるという利点もある。そこで各研究班における課題をいかに解決するかを考慮しながら副題を設定した上で、研究を進めるにあたっての共通確認事項を次のように設定した。

- ① 研究班における課題解決のための仮説を立てる。
- ② 研究計画を立てる。
- ③ 教育課程や指導計画の見直し、改善などを行う。
- ④ 教材研究を行う。
- ⑤ 授業研究を行う。
- ⑥ 研究の評価を行う。

「授業づくり」を行う際には、次項に記した『共に生きる力』の概念やこれまでの研究の成果を生かしながら、「自ら学ぶ」児童生徒を育てることを大切にしていきたい。将来の自立や社会参加の仕方として就労だけでなく様々な方法があることなど、幼児児童生徒や卒業生の各段階で障がいの状態や特性に応じた自立や社会参加の方法があることを確認するとともに、『共に生きる力』の8つの力を目指す目標としながらも、その到達度には児童生徒の実態や環境、ライフステージによって幅広い状態があると考えたい。

そして、全体研修も同じテーマで取り組み、特別支援学校（知的障がい）教育課程についての研修、行動分析の仕方、対応の仕方、障がいについての学習など、研究で必要とすることを学ぶ場となるようにしたい。そして、課題解決に向けて全職員でその方策を考え、実践し、この研究を推進していきたいと考える。

### Ⅲ 『共に生きる力』について

本校がこれまでの研究において、児童生徒の生活年齢の段階と周りの環境との関わりにおける必要な力をまとめたものであり、①健康体力②身近生活力③余暇を楽しむ力④コミュニケーション能力⑤自己選択、決定力⑥働く力⑦経済生活への参加力⑧その他、の8つからなっている。

『共に生きる力』とは、障がいのある者とない者が同じ社会に生きる人間としてお互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合っていく社会にあつて、児童生徒が地域社会の一員として、生涯にわたって様々な人々と交流し、主体的に社会参加しながら心豊かに生きていくことができる力と捉えて、本校の教育活動を考えるときに大切な概念としている。それは、宮崎県の目指す共生社会の実現にむけて本校が取り組むことの一つであるとも言える。

また本校におけるキャリア教育は「児童生徒それぞれに合った将来の自立と社会参加をするための教育」とし、教育活動全体で行うこととしている（図2「キャリア教育」全体計画参照：本文4ページ／平成20・21年度宮崎県教育委員会指定研究）。「共に生きる力」を育む教育と本校におけるキャリア教育とは、その目指すところから密接な関係にあり、今後もその取組を充実させていく必要がある。

そして本校の児童生徒は、幅広い年齢や発達段階、ライフステージにあるため、本校における「自立」と「社会参加」については、次のように定義している。「自立」とは、「最小の支援でその人が自分の持っている力を100%発揮する状態」であり、「社会参加」とは、「児童生徒や卒業生がそれぞれの生活の場において適応できている状態」である。また、「適応できている」ということの意味も、ありのままの自分で、その日一日を心豊かに暮らすことや自分の役割を果たし貢献できていることも含めて考えるようにした。

さらにこの『共に生きる力』を育むために行う教育活動の基礎には、ICFの概念の正しい理解や人権教育を基礎とした正しい障がいの認識があると考えている。

次ページの図1は、『共に生きる力』の構造図である。

# 1 「共に生きる力」の構造

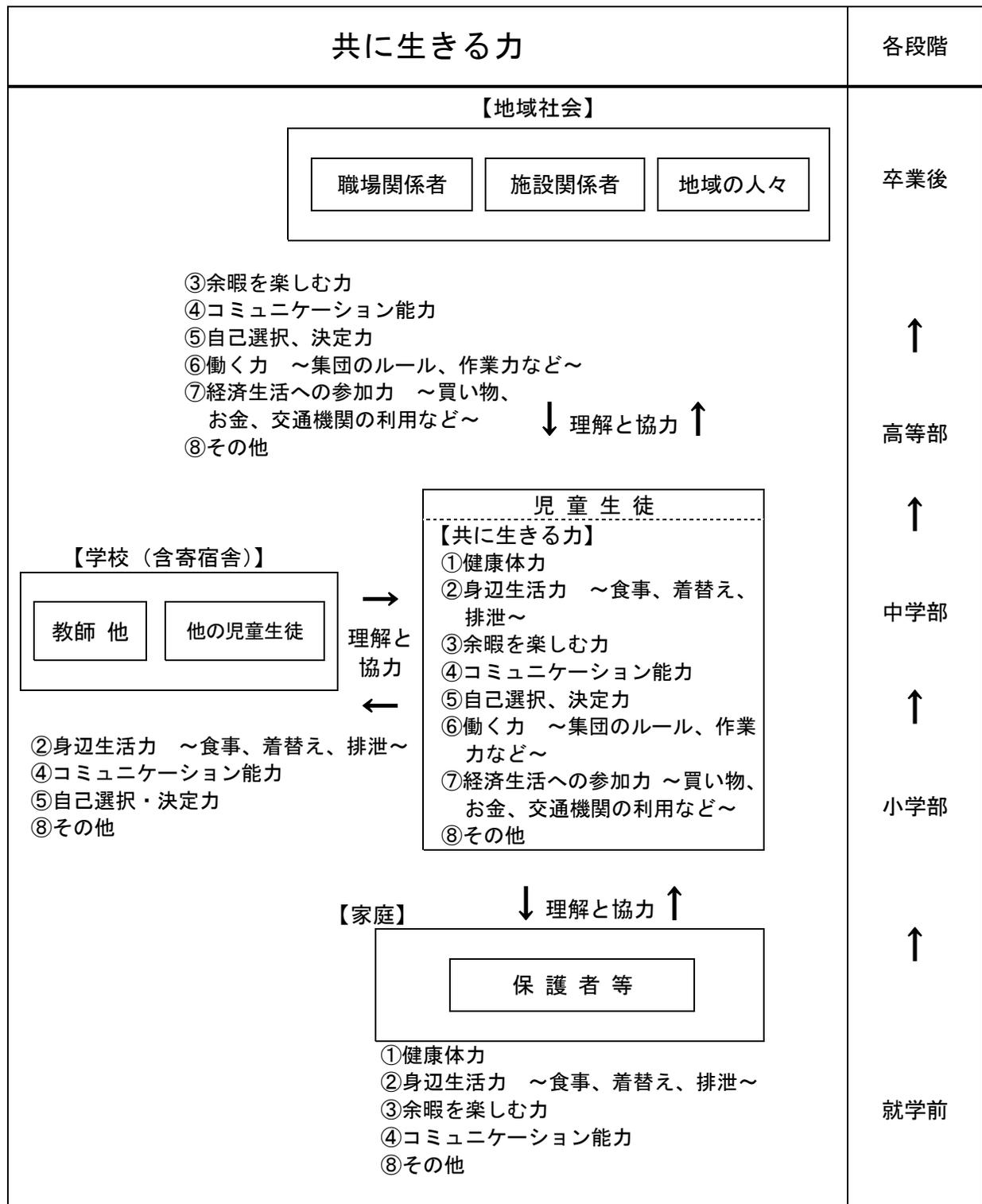


図 1 : みやざき中央支援学校『共に生きる力』構造図

## 2 みやざき中央支援学校におけるキャリア教育

<p><b>キャリア教育の目的</b></p> <p>ライフステージや発達段階に応じて求められる役割を果たそうとする意欲や具体的な力を身につけ、自立と社会参加、豊かな生活の実現を図る。</p> <p>〈キャリア教育の内容〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○勤労観、職業観の育成</li> <li>○家庭生活、社会生活に必要な知識や技能の育成</li> <li>○自主的、主体的に活動する力の育成</li> </ul>	<p><b>学校教育目標</b></p> <p>自立と社会参加を目指して、自ら学び、心豊かでたくましく生きる児童生徒の育成を図る</p> <p>〈めざす児童生徒像〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○元気でねばり強い子ども</li> <li>○明るくやさしい子ども</li> <li>○進んで取り組む子ども</li> </ul> <p>〈共に生きる力〉</p> <p>①健康体力②身辺生活力③余暇を楽しむ力④コミュニケーション能力⑤自己選択、決定力⑥働く力⑦経済生活への参加力⑧その他</p>	<p><b>教育関係法規</b></p> <p>日本国憲法、教育基本法、学校教育法、学習指導要領、宮崎県教育基本指針</p> <p><b>児童生徒・保護者の願い</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○自分のことは自分でできるようになりたい</li> <li>○毎日、元気に楽しく生活したい</li> <li>○いろいろな事に挑戦し、やりたい仕事を見つめたい</li> <li>○家から遠くないところで働きたい</li> </ul>
--	---	--

学部・学級・舎目標			
一人一人の障がいの状態、発達段階及び特性等に応じた指導を進め、その可能性を最大限に伸ばす。			
〈小学部〉	〈中学部〉	〈高等部〉	〈寄宿舎〉
<ul style="list-style-type: none"> <li>○健康で安全な日常生活を送るために、必要な体力、基本的な生活習慣を身につける。</li> <li>○集団生活に進んで参加し、楽しく仲良く生活する気持ちを持つ。</li> <li>○身近な役割を果たすことの喜びや最後までがんばりぬこうとする気持ちを持つ。</li> <li>○楽しく学習することや様々な体験活動をおして、学ぶ楽しさを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○健康で安全な日常生活を送るための体力、基本的な生活習慣を養う。</li> <li>○集団生活に意欲的に参加し、友達と協調して生活する力を養う。</li> <li>○自分の役割を理解し、最後までやりとげようとする態度を育てる。</li> <li>○学習の仕方を選び、社会生活に必要な基礎的・基本的な知識・技能を育てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○たくましく社会生活・家庭生活をおくる力をつけるために、健康の維持・増進、基本的な生活習慣を確立する。</li> <li>○社会生活や家庭生活・職業生活のために、対人関係能力(集団参加・コミュニケーション等)を養う。</li> <li>○社会生活や家庭生活・職業生活のために、自分の役割を果たし、働く喜びを感じ、貢献する態度を育てる。</li> <li>○たくましく社会生活・家庭生活をおくる力をつけるために、将来の生活課題を想定した必要な基礎的・基本的な知識技能を育てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日常生活に必要な基本的な生活習慣の確立を図り、社会に適応する態度や能力を高める。</li> <li>○自分の力で自分の身の処置をする意欲や能力を養う。</li> <li>○集団生活に参加しみんなと仲良くできる態度を養う。</li> <li>○健康な体と明るく素直な性格を培う。</li> <li>○ゆとりと時間や余暇の時間を活用する能力を高める。</li> </ul>

進路支援部方針	キャリア発達の目標【キャリア発達段階・内容表(試案)より】				
	小学部	中学部	高等部	卒業後の生活	
<p>○児童生徒・保護者の思いや願いを支え、その実現に向けた適切な支援ができるよう、小学部からの組織的なキャリア教育を推進する。</p> <p>○児童生徒の障がいの状況及び発達段階や特性等に応じた適切な進路指導を進めるとともに、自立を支援しながら社会生活を行うための環境づくりを推進する。</p> <p>〈主な取り組み〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○進路学習、進路相談、現場実習・就労前実習、進路情報、調査統計、追指導など、</li> <li>○職場開拓、進路研修会、支援会議</li> </ul>	<p>基礎的・汎用的能力</p> <p>職業及び生活にかかわる基礎的スキル獲得の時期</p>	<p>基礎的・汎用的能力</p> <p>職業及び生活にかかわる基礎的スキルを土台に、それらを統合して働くことに応用するスキル獲得の時期</p>	<p>基礎的・汎用的能力</p> <p>職業及び卒業後の家庭生活に必要なスキルを実践に働く生活を想定して具体的に活用するためのスキル獲得の時期</p>	<p>仕事、家庭生活、余暇など</p>	
	人間関係形成・社会形成能力	集団参加	協力・共同		
	自己理解・自己管理能力	意思表現	他者理解		自己理解
	課題対応能力	人との関わり	自己理解		
	キャリアプランニング能力	挨拶、清潔、身だしなみ			
		振り返り	肯定的な自己評価		
		夢や希望			自己調整
			生きがい・やりがい		
		役割の理解と分担	働くことの意味		役割の理解と実行
		習慣形成			
	様々な情報への関心				
	社会のきまり		法や制度の理解		
	金銭の扱い	金銭の管理	消費生活の理解		
	選択	選択(決定、責任)			

本校におけるキャリア教育		
「児童生徒それぞれに合った将来の自立と社会参加をするための教育[指導・支援]」 →教育活動全体で行う		
小学部	中学部	高等部
各教科 道徳 特別活動 自立活動	各教科 道徳 特別活動 自立活動 総合的な学習の時間	各教科 道徳 特別活動 自立活動 総合的な学習の時間

キャリア教育の基盤					
専門性の向上	保護者との連携	地域との連携	関係機関との連携	校内の組織作り	啓発活動
<ul style="list-style-type: none"> <li>○自主的、主体的な活動を促す具体的な支援の方法</li> <li>○児童生徒の思いを育てるキャリアカウンセリング</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○進路研修会</li> <li>○連絡帳の活用</li> <li>○二者・三者面談、個別面談</li> <li>○ケース会議、支援会議</li> <li>○関係行事</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域の行事への参加</li> <li>○交流・共同学習</li> <li>○地域資源の活用</li> <li>○居住地校交流</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○福祉、医療、労働機関との定期的な情報交換</li> <li>○支援会議の開催</li> <li>○他校との連携</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体推進計画</li> <li>○全体学習計画</li> <li>○学部、学年、校務分掌間の連携</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学校HPによる発信</li> <li>○関係会議等による活動</li> <li>○リーフレット</li> </ul>

図2：みやざき中央支援学校キャリア教育全体計画

#### Ⅳ 研究の仮説

『共に生きる力』の構造をもとに、児童生徒一人一人の指導内容や方法及び支援の在り方の工夫・改善を図り、「授業づくり（支援の在り方の改善）」を行えば、児童生徒の望ましい成長・発達が促され主体的な学習活動が実現し、自立と社会参加のための資質向上につながるであろう。

#### Ⅴ 研究の組織

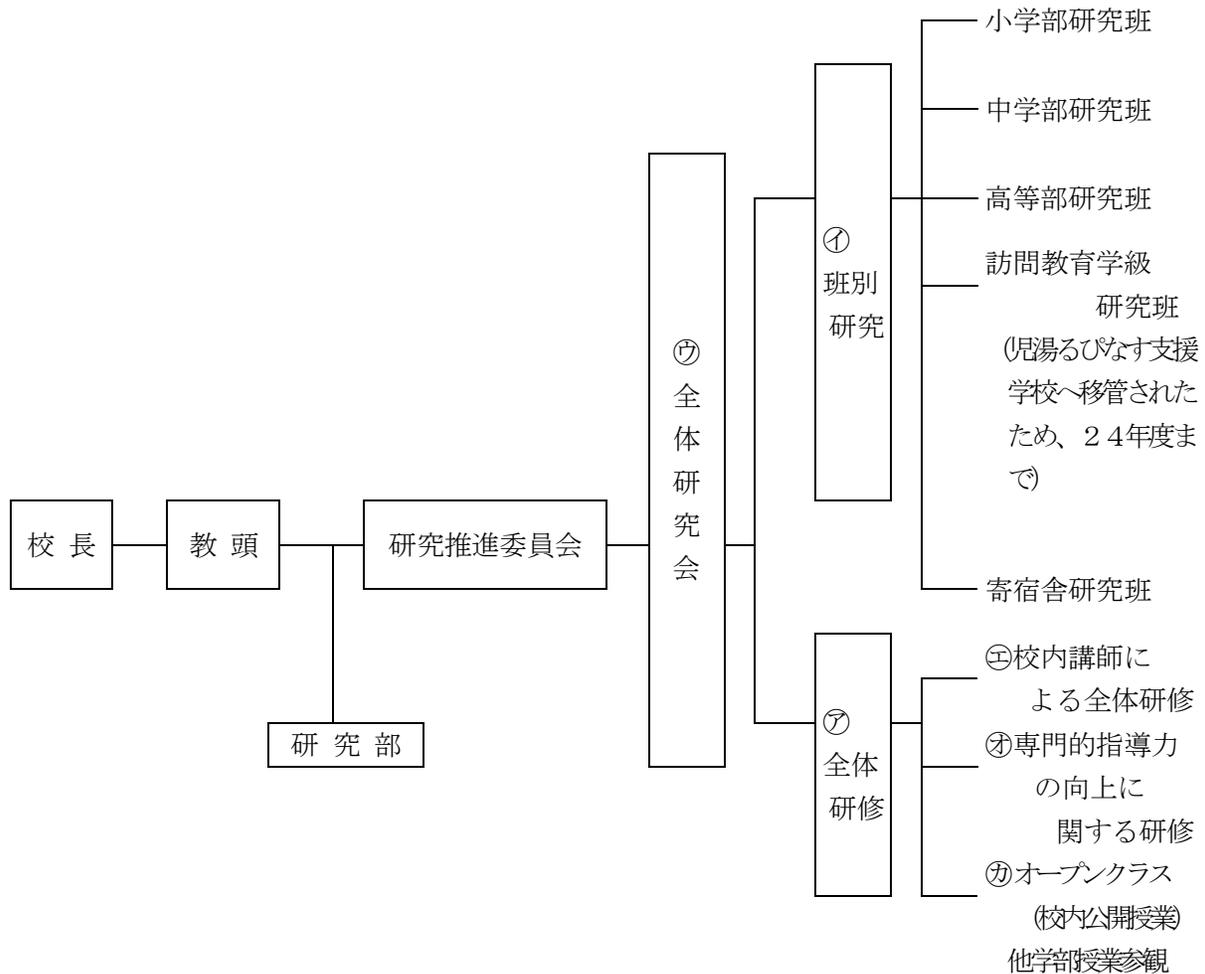


図3：みやざき中央支援学校研究組織

## VI 研究の方法

小学部、中学部、高等部、訪問教育学級（24年度まで）、寄宿舎の5班（25年度より4班）で構成した班別研究において、『共に生きる力』を育むための具体的な指導内容や方法及び支援の在り方について、実践を通して検証する。また併せて全体研究会や全体研修を行うようにする。

### 1 全体研修（…㉞）について

『共に生きる力』を育むための指導や支援に必要なことを学び、知肢併置校、センター的機能を果たす特別支援学校として必要な専門的指導力の向上に関する研修を行う。

#### ア 「校内講師による全体研修」…㉟

- 専門的指導力の向上を図るための基礎的内容
- 講師は、校内の専門知識をもつ人材に依頼
- 方法・内容としては、新転任者研修、障がいや指導法に関するグループ討議、進路や特別支援教育コーディネーターのことを共通理解するための研修など

#### イ 専門的指導力の向上に関する研修…㊱

- 職員のニーズや専門的指導力の向上のため本校に必要と思われるより専門的な内容について研修会を実施する。
- 講師を校外から招聘したり、校内の専門の知識をもつ人材を活用したりする。
- 文部科学省委託事業による「特別支援学校のセンター的機能充実事業（特別支援教育セミナー）」については、地域のセンター的役割を果たすための取組の一つであり、校外からの参加者も多数予想される。教育支援部・教務部等との連携のもと、実施する。

#### ウ 「オープンクラス（校内公開授業）」・「他学部授業参観」（…㊲）の設定

研究の成果・検証としての授業実践を広く校内職員に公開することによって、改善の場とするとともに学部間の理解と連携を図る（オープンクラス）。

また、他学部の授業を自由に参観できる機会を設け、より一層学部間の理解と連携を図る（他学部授業参観）。

#### エ その他

- ① 各校務分掌部が実施する研修についても、必要に応じて積極的に協力する。
- ② 全体研修の内容や講師の選定については、研究との連携が取れたものとなるような努力を行うものとする。また全体研修・研究の意義を確認した上で、内容や場所の工夫を行い、多くの職員の満足度を高める研究・研修に努める。

## 2 班別研究 (…④) について

班別研究において表1のような研究副題を設定し、それぞれ研究に取り組んだ。

表1：各班の研究・研修の内容

班	研究副題
小学部研究班	『子どもが「もう1度やりたい」と思う授業づくり ～自主性とかかわり合う力の育成を目指して～』
中学部研究班	『生徒一人ひとりが進んで取り組む授業づくりを目指して』
高等部研究班	『生徒の実態に合った効果的な課題別学習のあり方 ～新教育課程の創設と移行を目指して～』
訪問教育学級研究班 (24年度まで)	『学齢超過生の教育から生涯教育への展望』
寄宿舎研究班	『生活能力を高める支援の在り方はどうあればよいか ～自立に向けての指導～』

## 3 全体研究会 (…⑤) について

全体研究会として、研究の見通しを確認することや各研究班の1年間の取組の報告を行った。各班の情報交換を行うと共に研究・研修の成果を共有する場とした。

また、「研究のまとめ」を作成し、研究内容・方法の積み上げを図る。

## VII 研究計画

### (ア) 研究の期間

本研究は、平成24年度から平成26年度までの3カ年で取り組む。

#### 研究の概要

『共に生きる力』を育むための「授業づくり（支援の在り方の改善）」を考え、実践するものとする。

具体的には、昨年度、各研究班において見直し・改善を行った教育課程の試行とその授業検証を行う。また、授業研究の行い方や発達障がいの特性の理解、必要に応じた支援のできる実践的指導力と専門性の向上を図ることを目的とした研修を行う。

### (イ) 研究の進め方についての確認事項

#### a 「スクラップ アンド ビルド」と「業務のシステム化」

研究成果を実現するための取組には様々な方法・手段があると思われるが、その全てを実現することは時間や予算面から厳しい面がある。また我々の職場では、事業間の調整がうまくいかなかったり、時間も含めたコスト意識が欠如したりしたために、文書や業務が増えていくことがよくある。そのようなことが起こらないよう、「スクラップ アンド ビルド（たとえば新しいことを始めるときには、同時に従来のもを整理したり廃止したりすることを検討する）」と「業務のシステム化（様式のみを設定ではなく、いつ、どこで、誰が、何を行うのかを定める）」をキーワードとして研究の計画や実施にあたりたい。

#### b 研究の進め方についての共通理解事項

組織が大きく、職員数が多い本校において研究を円滑に進めるために下記のことについて共通理解を図った。

- ① 学校（職員）全体で取り組み、研究において立場は対等であること。
- ② 討論は自由であり、意見は代案をもった建設的な「改善案」であること。
- ③ 結論を全体の総意とすること。
- ④ 解決方法が具体的で明確にだせること（～したい、で終わらない）。

## VII 研究・研修の経過

表2に示した期日や内容で、本年度の研究を行った。

また、表3に示した期日や内容で、本年度の各種研修を行った。

表2《平成26年度 研究の経過》

学期	月日(曜日)	校 内 研 究 (主 題 研 究)	備 考
1 学 期	4 / 7 (月)	[45] 研究推進委員会 研究全般について	
	4 / 24 (木)	[35] 全体研究 研究概要説明(説明と確認)	
	5 / 21 (水)	[35] 小・中・高	
	5 / 30 (金)	[35] 小・中・高	
	6 / 6 (金)	[95] 小・中・高	
	6 / 13 (金)	[95] 小	※ 中学部…しごとチャレンジ最終日 ※ 高等部…現場実習準備日
	7 / 4 (金)	[50] 小・中・高	
	7 / 18 (金)	[50] 小・中・高	
	7 / 22 (火)	[35] 小・中・高	
夏 季 休 業 中	7 / 24 (木)	[50] 小・中・高	
	7 / 29 (火)	[50] 小・中・高	
	8 / 22 (金)	[100] 小・中・高	
	8 / 27 (水)	[50] 小・中・高	
	8 / 29 (金)	[50] 小・中・高	
2 学 期	9 / 5 (金)	[50] 小・中・高	
	9 / 12 (金)	[50] 小・中・高	
	9 / 18 (木)	[35] 小・中・高	
	9 / 26 (金)	[95] 小・中・高	
	10 / 3 (金)	[95] 小・中・高	
	10 / 24 (金)	[95] 小・中・高	
	10 / 29 (水)	[35] 小・中・高	
	11 / 14 (金)	[50] 小・中・高	
	11 / 18 (火)	[35] 小・中・高	
3 学 期	1 / 9 (金)	[50] 小・中・高	
	1 / 16 (金)	[50] 小・中・高	
	2 / 6 (金)	[50] 小・中・高	
	2 / 20 (金)	[95] 全体研究 研究報告会	

※ 勤務体制の違いから、寄宿舎研究班は別途計画に従い、研究を行った。

表3 《平成26年度 研修の経過（研究部主催の研修）》

日付	研修内容	備考
5 / 9 (金)	『合理的配慮に関する研修 ～障害者差別解消法と インクルーシブ教育システム構築について～』 講師：本校チーフコーディネーター 小野真嗣 教諭	
5 / 30 (金)	『進路支援に関する基本情報と演習』 講師：本校進路指導主事 真田匡業 教諭	
10 / 31 (金)	第53回 全日本特別支援教育研究連盟 全国大会宮崎大会  大会テーマ 『共に育ち 共に築き 共に輝く子どもたち』	宮崎県 特別支援教育研究連合 知的障がい教育 研究部会 主催  授業公開校 第9・13・17分科会 会場校
9 / 26 (金) 10 / 3 (金)	『指導助言を得ながらの事例研究（各学部別）』 講師：本校 足立明彦 指導教諭	
2 / 6 (金)	文部科学省委託事業 「特別支援学校のセンター的機能充実事業」 特別支援教育研究セミナー  『ICTを活用した指導・支援の在り方について』  講師：東京大学先端科学技術研究センター 准教授 近藤武夫 氏	
2 / 20 (金)	『平成26年度 全体研究報告会』	

## 平成26年度 小学部研究班

### 1 小学部研究副題

『子どもが「もう1度やりたい」と思う授業づくり～自主性とかかわり合う力の育成を目指して～』

### 2 副題設定の理由

小学部では、子どもたちがよりよい自立と社会参加を目指すためには何が必要かについて、キャリア教育の視点から研究を進めてきた。その研究をとおり、小学部段階にある子どもたちにおいては、何かに取り組み「やった！できたぞ！」「またやってみたい！」という達成感をたくさん味わわせることが大切だということを確認した。その達成感の上に、勤労観・職業観と積み上げられ育っていくと考えた（図1）。

「できた！またやってみたい！」という気持ちを育てることは、自主的活動のできる子どもたちを育成することである。そこで、小学部の授業づくりのポイントとして「子どもたちが楽しんで取り組める」ということを

キーワードとして授業改善に取り組んできた。これまでの研究をとおり子どもたちが興味・関心を示し、自主的に取り組めるように工夫していくことが大切だということがわかった。しかし一方では、楽しませるだけでいいのか、子どもたちの将来の生活につながる、小学部段階からつけておきたい力とは何があるのかについては十分な検討ができていなかった。そこで今回の研究では、まず現在の小学部の課題はどこにあるのかを話し合い、下記のような課題が浮かびあがった。

- 現在の小学部の子どもたちは教師とのかかわりを楽しむ力はある反面、子ども同士でかかわり合おうとする姿は少なくうまくかかわれないことがある。
- 学習活動がクラスの中だけで完結してしまいがちである。クラスを越えた取組を行い活動集団に変化をもたせることで、子どもたち同士の関係づくりが活発にできるようになるのではないかと。
- 成功経験が少ないことなどにより、自主的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないところがある。

このような課題を解決するために、自主的に活動に取り組む力、友だち同士で関わる力を育成し、子どもが「もう1度やりたい」と感じられるような授業づくりを検討・実践していくことにした。

そうすることで、児童が楽しみながらも、それぞれの目標達成に向けて意欲的に活動できるようになるのではないかと考えこの副題を設定した。

### 3 研究仮説

自主的に活動に取り組む力、友だち同士でかかわる力を育成することで、子どもが「もう1度やりたい」と感じる授業づくりができるのではないかと。

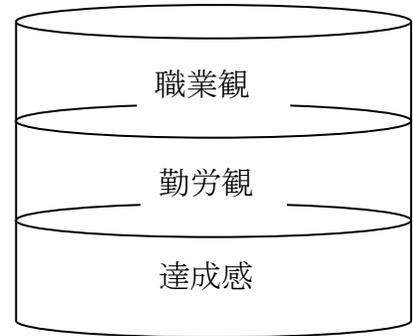


図1：小学部における達成感・勤労観・職業観

#### 4 研究の方法

学年を基本とした4つのグループに分かれて授業づくりに取り組んだ。まず初めに、昨年度作成した「自主的に活動に取り組む力」「友だち同士でかかわる力」の段階表をもとに児童の実態把握をおこなった。その後、各グループの児童の実態や目標に合った授業内容を決定した。授業内容については以下の通りである。

1年生：「夏を楽しもう（感覚遊び・水遊び）」 2年生：「みんなであそぼう～かくれんぼ～」  
3, 4年生：「朝の会」 5, 6年生：「みんなで遊ぼう～さいころ相撲～」

授業を行う際には、昨年度の研究で整理した「子どもがもう一度やりたいと思う授業作りのポイント」を入れて行うことにした。

#### 5 研究の内容

各グループのまとめは以下のとおりである。

(1) 1年の研究

ア 単元名 夏を楽しもう (感覚遊び・水遊び)

イ 研究の実際

① 期間 平成26年6月16日(月)～7月18日(金)

② 内容

授業名	内容	時間
水遊び(自由遊び)	おもちゃやビーチボール、浮き輪、ペットボトルシャワーなどで自由に遊ぶ。	3時間
泡遊び・泡スライダー+自由遊び	児童を3グループに分けて、泡作りをし、泡を互いの体に塗り合ったり、泡スライダーで滑ったりして遊ぶ。	2時間
ボディーペインティング+泡遊び・泡スライダー+ホースシャワー+自由遊び	1グループに1色指絵具を準備し、体に塗り合う。ある程度塗り終わったら、他のグループの色も塗り合い、色の交ざり具合を楽しめるようにした。十分遊んだ後は泡を塗り合って色を落とし、水を体にかけ合ったり、ホースシャワーで洗ったりした。	2時間
魚すくい+自由遊び	1グループ3名のうち、2名で協力してビニールプールに浮かべた魚をすくい、残りの1名が持つバケツに入れるようにした。グループ内の児童全員がペアになれるように3回行った。とった魚の数の合計が一番多かったグループに称賛を与えた。	2時間
ミニ夏祭りをしよう	スタンプラリー形式にし、これまで行った遊び(①泡遊び②ボディーペインティング③ホースシャワー④魚すくい)を順番に通って行った。グループの友達と協力し、スタンプが全部もらえたら、お楽しみ(すいかわり、かき氷)があるとした。	2時間

③手立て

- 児童が興味・関心を持てるようなおもちゃや手作りの教材・教具を用意した。
- 始まりと終わりのあいさつ当番を輪番で設け、児童に役割を設定した。
- 授業を進めるに当たり、前時に行った遊びに新しい遊びを追加し、活動が繰り返されていくようにした。職員も児童の中に入り、楽しい雰囲気作りに心がけた。
- 学級の枠を超えた数名の児童でグループを作り、同じグループで毎回活動を行うようにした。また、1つの教材を共有して使う場面を多く設定するようにした。
- 友達との道具の貸し借りの仕方で、模範となる動きをする児童をクローズアップし、称賛を与え、友達を意識できるようにした。

## ウ 成果

### ① 友だち同士で関わる力について

- 自分の学級の教師としか活動ができなかった児童が、水遊び以外の場面においても、他の学級の教師と目を合わせたり、笑顔を見せたりして一緒に活動するのを嫌がらなくなってきた。
- 遊びの中で1つの教材を共有して使う場面を多く設定したことで、友だちと一緒に協力して活動しようとする意識が芽生えるようになった。
- 学級の枠を超えた3名でグループを作り、リーダーなどの役割を持たせ、活動を継続してきたことで、他の学級の児童に興味を示さなかった児童が同じグループの児童の名前を呼んだり、手をひいて活動場所へ誘導したりする場面が見られるようになった。水遊び以外の場面でも名前を呼んだり、言葉をかけたりして、関心を寄せるようになった。

### ② 自主的に活動に取り組む力について

- 児童が興味・関心を持てるおもちゃや手作りの教材・教具を用意したり、同じ遊びを繰り返し行ったりしたことで、見通しを持って活動することができた。
- 一人遊びや対教師としか遊べなかった児童が、いろんな遊びに興味を示し、時間いっぱい友達や教師と一緒に楽しむことができた。

## (2) 2年の研究

ア 題材名「みんなで遊ぼう～かくれんぼ～」

イ 目標

- ・かくれんぼのルールや約束を守り、工夫して楽しく活動することができる。
- ・友だちと一緒に、隠れたり見つけたりしながらなかよく遊ぶことができる。

ウ 研究の実際

### ① 題材設定の理由

遊びは、子どもたちが生き生きと活動できる時間であり、子どもの生活は遊びそのものであるといわれるほどである。遊びの中には、遊び自体を楽しむ力や自主的自発的な活動、身体の発達を促す力、知的能力を発達させる力、社会性を形成する力など、子どもたちの成長につながる様々な要素が含まれていると考えられる。2年生の児童は、発達段階に幅があり、身体的な活動や友だちとの関わりにも個人差がかなりあり、「遊びを知らない」「遊びが弱い」という状態がみられる。そこで、年間を通して友だちと継続して取り組むことで児童ひとりひとりの遊びが広がり、友だちとふれあうことの楽しさを味わうことができるのではないかと考え、生活単元学習の中で集団遊びを取り入れた内容を設定した。

### ② 内容及び期間

期間	内容	内容設定の理由
6月～7月	だるまさんがころんだ	ルールが簡単で個人の動きが主な遊びであるが、友だちと一緒に遊ぶ時間を意識し、集団で遊ぶ楽しさを感じさせていきたい。
9月～12月	かくれんぼ	ルールの中で友だちを意識し、個人個人が探す・隠れるというやりとりや、最後まで見つからないように隠れ続ける遊びの楽しさを感じさせていきたい。
1月～2月	じゃんけん じんとり	個人ではなくグループの友達と協力しながらゲームに勝ち進んでいくルールの中で、仲間を意識しあった遊びを楽しめるようにする。

※2年生では毎週水曜日の5校時に遊びの時間を設定し、その中で「かくれんぼ遊び」に焦点を当てて研究に取り組み、児童の活動への取り組みの様子などの検証を行ってきた。研究の実際は以下に記載していく。

### ③ 手立てや工夫

(ア)「自主的に活動に取り組む力」について

- 役割やルールを理解できるよう、絵カードや写真カード・鬼の帽子・ホワイトボードなど活用した。
- 隠れる場所を大まかに設定するが、児童の活動に際して、教師は見守り、言葉かけや支援を精選する。
- 最後まで隠れていた児童は、友だちの前でトロフィーをもらいみんなで称賛する。

(イ)「友だち同士でかかわる力」について

- 鬼の役や隠れる役を友だちの中で決め、それぞれの役割を理解しながら活動していく。
- 鬼の役では、ホワイトボードで見つけた友だちを確認しながら最後まで活動できるようにする。
- 隠れる時には「もういいかい」「まあだだよ」のかけ声のやりとりを楽しみながら活動をしたり、友だちの行動を感じたりしながら隠れることができるようにする。
- 最後まで待つことができるよう自分の椅子を用意しておき、見つかった友だちと並んで座るようにする。

エ 成果と課題 (○は成果、●は課題) (個人の目標と評価については別紙資料を参照)

① 「自主的に活動に取り組む力」について

- 同じ場所に隠れる児童がいたため、職員が「隠れる場所を作ってもいいですよ」と声をかけると机や椅子、布、段ボール等を用いて率先して隠れ家を作る児童もいた。
- かくれんぼ遊びを始めた頃、隠れる役の児童はおしゃべりをしていたり、じっと待てなかったりしていたが、遊びを継続させたことで、静かに隠れたり、待つ時間が長くなったりとルールが守れるようになってきた。
- 自分で隠れる場所を考えたり、自分から動いて隠れたりすることできるようになった。
- 遊びを繰り返すなかで、雰囲気を楽しみながら活動できるようになり、鬼の役ではカーテンや段ボールに手を伸ばして友だちを探すことや、隠れていて見つかるまで静かに待つことができるようになった。

② 「友だちとかかわる力」について

- 鬼の役になった児童は、自分の視界に入った友だちを見つけるだけでなく、ホワイトボードの写真の中から見つけたい児童を決め、相手を意識しながら探す場面も見られた。
- 隠れることが持続できない児童も、友達が隠れるのを模倣して、動かずに隠れることができる時間が少しずつ長くなった。休み時間も自分から友達に「かくれんぼをしよう」と遊びを誘う姿も見られるようになった。
- かくれんぼ遊びの時間に友だちが集まるとリラックスしてその中に入れるようになり、隠れる・待つなどの行動を友だちと一緒にできるようになった。ホワイトボードを使って相手を確認できる児童もいた。
- 繰り返し遊ぶ機会を設けていくことが必要だと思われる。また、職員の支援の精選と合わせて職員も子どもたちの中で一緒に遊びを楽しみ遊び込むことが大切ではないかと考える。

### (3) 3・4年グループ研究

ア 題材名「あさのかい」

イ 目標

- ・一人一人が自分の役割を理解し、見通しをもって取り組むことができる。
- ・互いに協力し合いながら子ども同士で会を進めることができる。

ウ 研究の実際

① 題材設定の理由

毎日繰り返し行っている活動のためどの児童も見通しを持ちやすく、実態差にも対応しやすいという点。その中で個に応じた役割を設定することで目標も明確になり、達成しやすいのではないかと考え、この単元を設定した。

② 内容及び期間

【内容】：「あいさつ」「けんこうかんさつ」「てんき」「ひづけ」「じかんわり」  
「きゅうしょく」「あさのうた」

【期間】：9月から12月

③ 手立てや工夫

(ア)「自主的に活動に取り組む力」について

- ・一人ひとりに応じた役割を設定し、個に応じた教材を提示する。
- ・朝の会のスケジュールと児童のそれぞれの役割をホワイトボードに掲示する。
- ・司会の児童が進行し、教師の言葉かけや支援を精選する。

(イ)「友だち同士でかかわる力」について

- ・「あさのうた」は友だちと二人一組で手をつなぐ歌遊びを実施する。
- ・実態に応じてペアの友だちを決め、その友だちと一緒に活動に参加できるようにする。
- ・司会の児童が進行し、教師の言葉かけや支援を精選する。

エ 成果と課題（○は成果、●は課題）（個人の目標と評価については別紙資料を参照）

①「自主的に活動に取り組む力」について

- 一人ひとりの役割を明確にしたことで、自分の係を意識し意欲的に取り組むことができた。
- 見通しを持ちにくい児童も、毎日繰り返すことで活動に見通しを持ち、自分の役割を理解して落ち着いて参加することができるようになった。

②「友だちとかかわる力」について

- 相手を意識できない段階にある児童においては、物を介して(写真カードの受取によって)友だちを意識することができるようになった。
- 歌遊びにおいては、特定の児童としか手をつなごうとしなかった児童も、繰り返すことでいろんな友だちと手をつないで楽しむことができるようになった。
- 児童同士で声を掛け合う姿も見られるようになり、自分たちで会を進めることができるようになった。

③ その他

- 登校時間にばらつきがあり、一斉に朝の会を始めることが難しいこともあった。

オ 異学年との関わりについて

朝の会での2つの目標を生かし、一年生を招待し遊ぶことにした。内容は子ども達が話し合いをして決め、プログラム作りやかざり作り、会の進行の練習などすべての準備を子ども達が役割分担し行った。

【内容】絵本の読み聞かせ、手遊び歌、ゲーム

【成果と課題（○は成果、●は課題）】

- 一人ひとりに応じた役割を与えたことで、どの児童も活動に参加することができた。
- 児童主導で交流の内容を決め、準備・運営までを行ったことで自分の役割が明確になっただけでなく、「自分たちがやる」という意識が高まり、互いに声を掛け合う姿も見られ、進んで活動に取り組むことができた。
- 下学年を招待したことで、自分たちが上学年であるという自覚が生まれ、さらにリーダー的役割を担うことにより、自分から働きかけたり、責任感を持って活動に取り組んだりする姿が見られた。また、下学年のお世話をしようとする態度や相手を思いやる気持ちが高まった。
- 下学年の児童にとっては身近なモデルができ、上学年を手本に良い所を真似ようとしたり、自分に生かそうとしたりする姿が見られた。
- 児童の主体性を高め、友だちとかかわる力を広げていくためにも継続的な異学年交流を実施していきたい。

(4) 5. 6年グループ研究

ア 単元名 みんなで遊ぼう～さいころ相撲～

イ 研究の実際

① 期間・・毎週火曜日の5, 6校時を5, 6学年の合同学習の時間として設定した。

6, 7月	児童がさいころ相撲を知り、慣れ親しむ期間。トーナメント形式で行った。
9～ 11月	相撲のように取組表を作り、毎回1対1形式で行った。(合計13取組) 行司審判、呼び出し、拍子木、採点ボード、さいころ積み立て、体操などの係を決めて児童一人一人が活躍できる場を設定した。
12月 (2回)	下級生を招待して、さいころ相撲を楽しんでもらうようにした。5, 6年生はお世話係として係の仕事を頑張った。

② 内容・・積み上げた段ボールの上にさいころをのせて、お互いに段ボールを倒し、サイコロの目の数で勝敗を競う。勝敗には偶然性があり、児童にも分かりやすい活動である。

③ 手立て

教材の工夫	段ボールに力士の絵を描いたり、取組表の児童の写真にちょんまげをつけたりして雰囲気を出した。また、活動の初めにお相撲体操を踊るなどして意識づけを行った。相撲の勝敗が児童に視覚的に分かるように採点ボードを使用した。
役割の設定	行司審判や呼び出しなどの係を作り、児童一人一人に係カードを首から提げさせて係りの仕事をさせた。対戦で負けても自分の係を頑張ることで達成感が得られるようにした。
友だちを意識できるような教材の提示	取組表には児童の写真としこ名を掲示した。また対戦前にはお互い握手をさせたり、倒す段ボールに対戦相手の顔写真を掲示したりすることで相手を意識できるようにした。

ウ 成果と課題(児童の様子も含めて)

① 友だちと関わる力について

- 友だち同士の自然な関わりが難しい児童がいるが、係の役割をもたせることで関わる機会が得られることもあった。(係をとおして関わる場面が見られた)
- さいころ係の友だちが頑張っているのを見て応援している児童もいた。
- 対戦前に握手をしたり、顔写真を掲示したりする工夫をしたが、段ボールを倒すという活動なので、対戦相手(友だち)を意識できていたのかは分からない。

② 自主的に活動に取り組む力について

- 初めは係の動きに戸惑う児童もいたが、繰り返し行ううちに動きがスムーズになってきた。さいころ係は回を重ねるに連れて仕事が早くなり、活動の積み重ねが大切だと改めて感じた。
- 活動を進めていきながら、児童に合わせて教材や場の設定を工夫してきたので児童が活動に取り組みやすくなったのではないか。
- 下級生を招待したときは、それぞれの係りの仕事をとても一生懸命に行っていた。

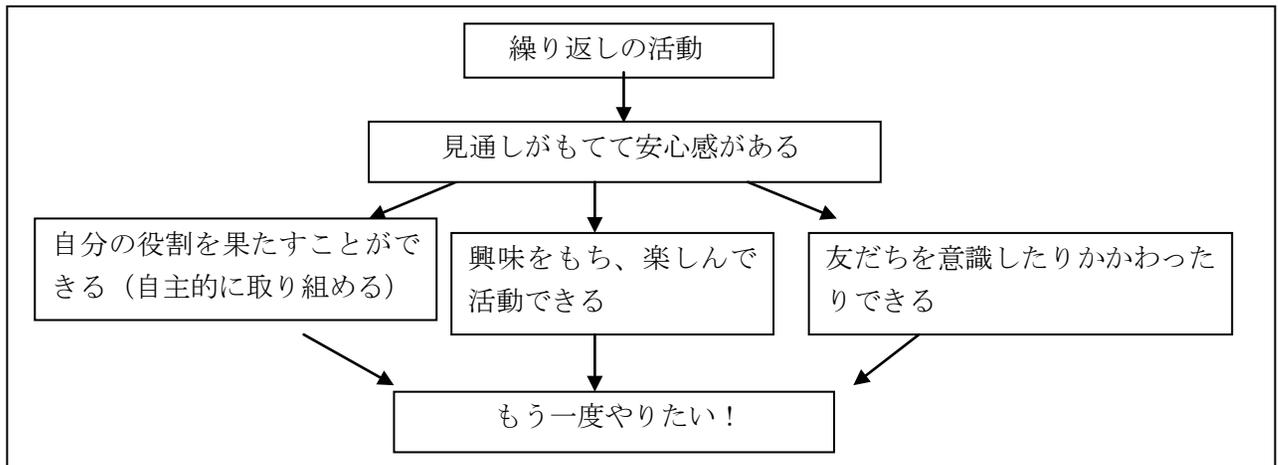
- 係を決めるのにルーレットを使用したので児童にいろいろな仕事を体験させることができた。下級生を招待したときは、その児童が一番できる仕事を選ぶことができた。
- 段ボールを倒すという動きは全員が取り組めた。
- サイコロの目の数で競っていたが、さいころ相撲の勝敗が最後まで分からなかった児童がいたので、手立てが必要である。

## 6 研究のまとめ

### (1) 平成26年度のまとめ

授業づくりにおいては、昨年度整理した「子どもがもう一度やりたいと思う授業づくりのポイント」を取り入れた授業を心がけたことによって、どの授業も児童にとって見通しのもてる授業になった。9つのポイントの中で特に重要だったのが「繰り返しの活動」である。どのグループも繰り返しを大切にされた授業であったため、児童は回数を重ねるごとに見通しを持つことができた。同じ友だち、先生、同じ内容で活動を行い児童が安心感を得たことで、楽しく活動することができたり、1人1人が自分の役割を果たすことができたり、友だちを意識したりすることにつながった。

以下は今年度の取組のまとめを図で表したものである。



また、今年度は異学年との交流も行った。5, 6年生は全学年を招待して「さいころずもう」を一緒に行った。3, 4年生は1年生を招待して一緒に遊んだ。2年生は3年生と一緒に「かくれんぼ」を行った。異学年とのかかわりを通して、低学年の児童が高学年の児童にあこがれを抱き、自分もこんな風になりたいと感じたり、高学年の児童が低学年の児童のお世話をすることで、先輩としてしっかりしなくてはいけないと感じたりすることが多々あった。小学部段階の児童にとって友だちを意識したり、友達とかかわったりしながら生活していくことはとても大切である。児童によっては教師からの指示よりも友だちを見本にしたほうがスムーズに取り組むことができることもある。子どもは子ども同士で育っていくことで自然に成長していける部分も多い。今回の取組をとおして支援学校だからこそ、異学年とのかかわりが重要であると実感した。今後もクラスを越え異学年とのかかわりが日常的にもてるような学部内の雰囲気や職員同士のコミュニケーションも大切であると考えている。

### (2) 3年間の研究を通して

小学部では、「友だち同士でかかわる力」「自主的に活動に取り組む力」を育成することを目指して研究に取り組んできた。1年目は年間指導計画を整理し新しく作成した。教科は指導内容を段階ごとに整理したり、各教科を合わせた指導においては学習内容の指導例を記載したりしたことで、誰もが見やすく評価もしやすいものになった。

それを基に2年目、3年目は学年グループごとに授業実践に取り組んできた。2年目は、小学部児童の「自主的に取り組む力」と「友だち同士でかかわる力」の実態を全職員で把握した。それぞれの授業実践の成果と課題を基に「子どもがもう一度やりたいと思う授業づくりのポイント」について整理することができた。3年目はそのポイントを取り入れた授業実践をおこなった。また、異学年との交流も取り入れた授業も行ってきた。3年間の研究を通して、児童の「友だち同士でかかわる力」や「自主的に取り組む力」を育てるためにはどうしたらよいかが整理された。

この3年間の研究をとおして、学部職員がじっくりと授業づくりに取り組むことができたことや、学年グループごとに取り組んだことでそれぞれのクラスの児童の実態を共有することができたことが大きな成果であった。日頃は授業づくりをじっくり話し合う時間もないのが現状である私たちにとっては、大変有意義な時間になった。そのことが、学部内の職員間のコミュニケーションを取りやすくし、よい雰囲気作りにもつながったのではないかと思う。

資料

表1：「自主的に活動に取り組む力」児童実態分布表

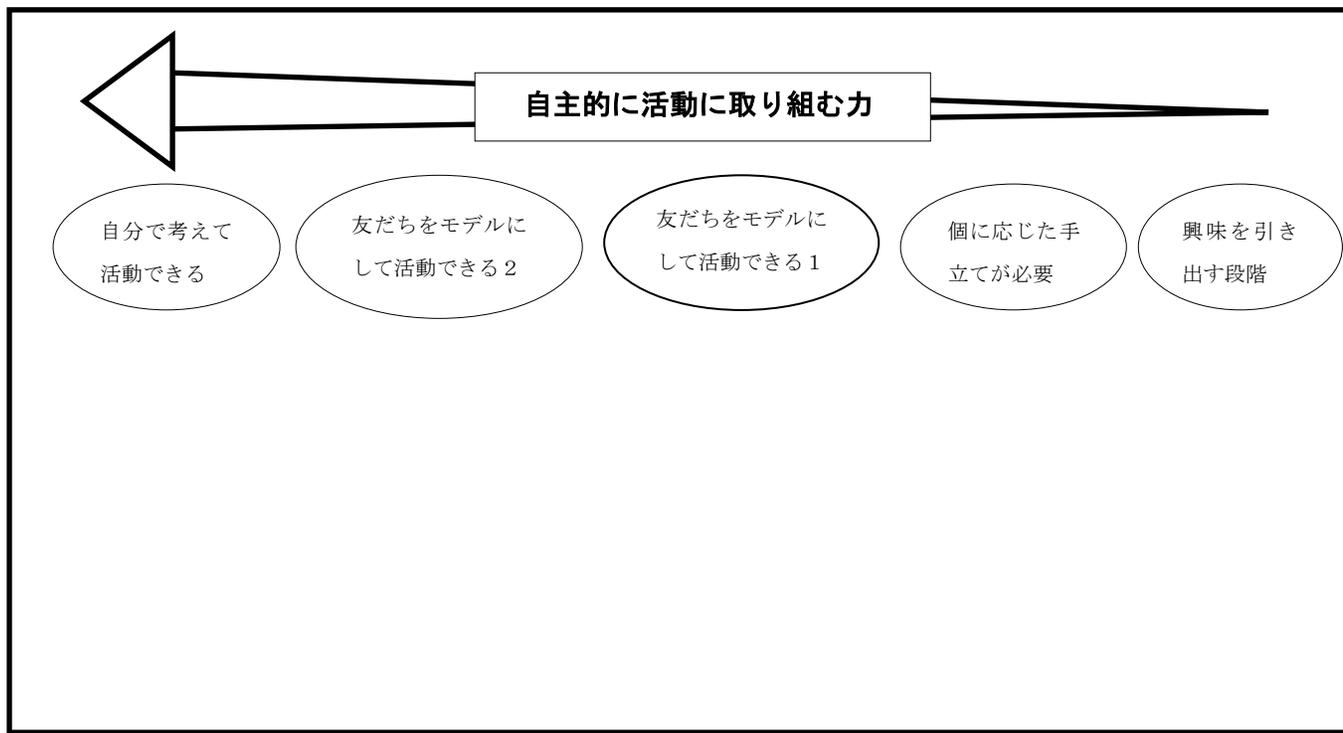


表2：「友だち同士で関わる力」児童実態分布表

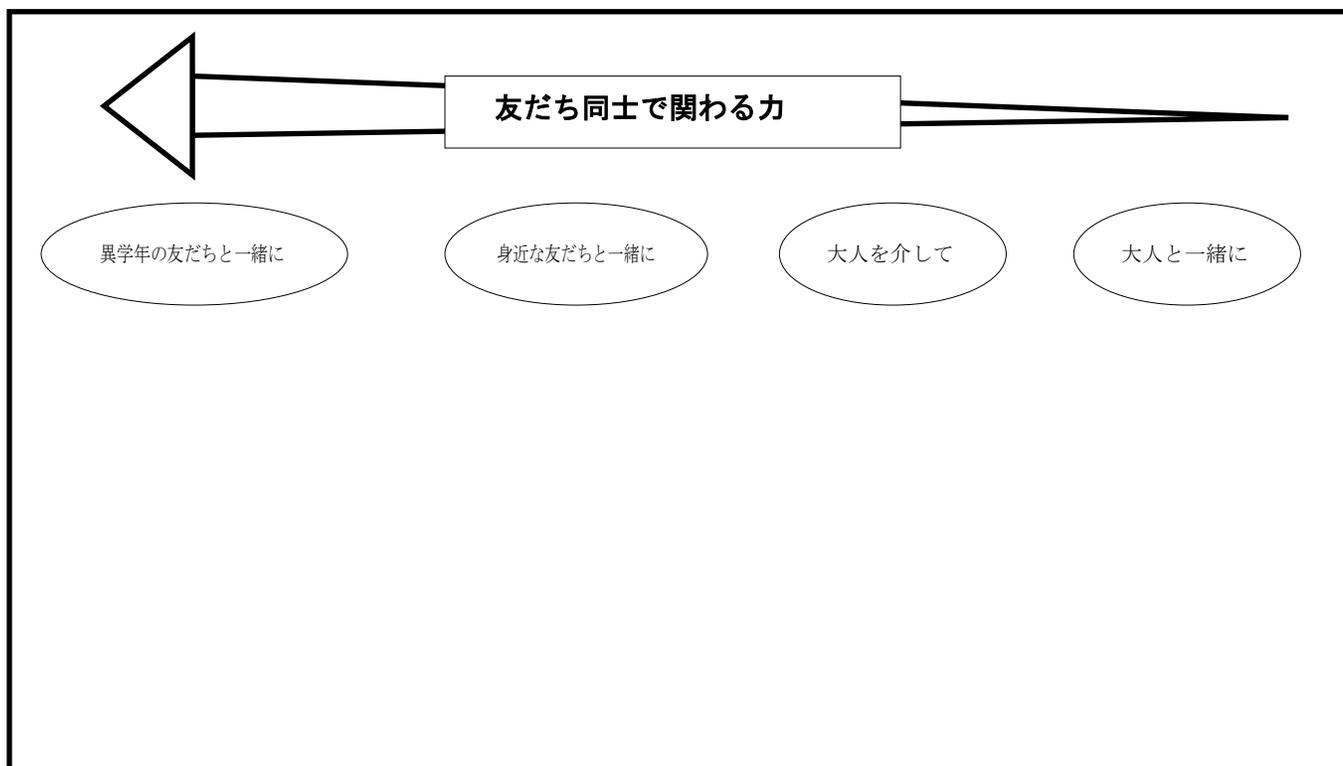


表3：評価シート

① 単元名

② 小単元目標

③ 個人目標

◎目標達成

○目標に近づいている

△目標に半分くらい

●まだまだ支援が必要

氏名	自主的に活動に取り組む力	◎○△●	友達と関わる力	◎○△●
A				
B				
C				
D				
E				
F				
G				
教材 教具		反省		

## 平成26年度 中学部研究班

### 1 研究副題

「生徒一人ひとりが進んで取り組む授業づくりを目指して」

### 2 副題設定の理由

中学部ではこの3年間で、将来の生活の場や働く場において、変化に対応したり、般化したりする力の素地づくりの時期とらえ、小学校から積み上げてきた力の充実と中学部卒業後の進路選択や自立と社会参加に向けた力を豊かにすることが大切だと考えている。

中学部からの学習形態は、学級を離れたり、異学年と活動したりする学習場面が増えるため、これらのことを達成させるためには、それぞれの集団の中で、生徒一人一人の実態や課題、目標を職員間で共通理解し、計画的・系統的な授業づくりをする必要がある。そこで、学習の柱である年間指導計画の改善・充実を図るため、それぞれの学習グループ内での協議の活性化を図る場を設け、より生徒のニーズに沿った支援・指導の実現を目指したいと考えたのである。

また、中学部の近年の入学者状況を考えた時、生徒数の増加、障がいの重複化、多様化、複雑化が進み、それに伴う自立と社会参加の幅が広がってきている。

中学部通常学級の教科学習（国語科・数学科）において、これまでに学習してきた内容の違いや学級内での学力の差、卒業後の進路選択の広がりなどの理由から、教科学習の更なる充実が必要となってきた。また、体育科においては、学部合同という授業形態の中で、重複学級の生徒が進んで取り組める授業づくりについて実践、検証することで、一人一人が楽しいと感じる学習活動の展開が図られると考えた。それによって、生徒が楽しみながら体力を向上させたり、生活の幅が広がったりすることが期待できる。

さらに、教育課程上週6時間と大きなウエイトを占め、異学年での学習形態となる「作業学習」にも視点を当て、生徒一人一人の将来を見据えた活動を充実させ、個に応じた対応や支援の在り方を探りたいと考えた。そして、キャリア教育の視点から見た作業学習の在り方やつきたい力を整理、確認し、これからの授業づくりの足がかりにしたい。これまで取り組んできたキャリア教育についての研究成果が十分に活用しきれていないという反省も踏まえ、もう一度、特別支援教育におけるキャリア教育について学び直し、職員間の共通理解を図り、生徒のより良い自立と社会参加を促したいと考え、本副題を設定した。

### 3 研究の仮説

それぞれの学習集団において、生徒一人一人の実態や課題、目標を共通理解し、それを達成させるための計画的・系統的な授業づくり、指導内容の工夫・改善を図れば、主体的に取り組む意欲が高まるとともに、より良い自立と社会参加につながるであろう。

### 4 研究の方法

- (1) 国語科・数学科・体育科の授業において、一人一人の実態に応じた指導・支援の在り方について改善を図る。
- (2) 各作業学習班の目標、個に応じた作業内容や目標、評価について議論し、共通認識を図る。

## 5 研究の内容

### (1) 国語班

#### ア 研究のねらい

生活の中には多くの国語的内容が含まれており、人とやりとりをしたり、文字を読み書きしたりしながら生活している。そのため、コミュニケーション力や読み書きの力を伸ばすことで、社会生活の拡大を図ることにつながると考え、生徒の実態や課題に応じた、きめ細やかな指導を充実させることをねらいとした。

#### イ 研究の内容

本研究の対象生徒は、実態差が大きく、身に付けさせたい力や課題も異なるため、読み書きグループ、話すグループ、重複グループの3つのグループに分かれて研究を行うことにした。

##### ① 読み書きグループ

###### (ア) 研究のねらい

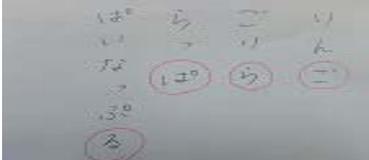
対象生徒の実態としては、

- 平仮名の50音はある程度読み書きができるが、時間があくと忘れていくことが多い。
- 一文字ずつ読むため、単語として読むことは難しい。絵があると、勘で答えることも多い。
- 平仮名の、「ひ」「め」「む」は書くことが難しい。「め」「ぬ」や「れ」「わ」「ね」など似ている文字は混乱する。

などが挙げられる。

それらの実態をふまえて、読み書きの力をつけることで、将来の生活力を高めることを目標に授業を行った。読み書きの指導をただの反復練習にならないよう、集中力が持続する楽しい授業づくりを目指して取り組んだ。

###### (イ) 研究の内容

<p>①なぞり書き枠</p> 	<p>厚紙に平仮名をくりぬいた用紙を貼り付け、何度もなぞり書きができるようにした。 溝があることで、線に沿ってなぞることができるようにした。</p>
<p>②「 」から始まる言葉</p> 	<p>プリントをラミネートし、繰り返し書いて消せるようにした。 平仮名には数字と色別で書き順を示し、始点と終点を赤丸で分かりやすくした。</p>
<p>③しりとりゲーム</p> 	<p>忘れやすいため、出た言葉を紙に書く。書くことが負担にならないように、教師が文字を書く。 一文字目の言葉をヒントとして伝える。 出た言葉に対して、質問をする。(どんな時に使うもの? どんな鳴き声? など)</p>

## (ウ) 成果と課題

- ②の教材を使ったところ、苦手だった「ひ」が書けるようになった。他の文字についても、とめやはねができるようになってきた。
- しりとりゲームを行うことで、友達と楽しく学習し、ルールの理解や語彙力も高まった。
- ただの反復学習ではなく、やりとりをしながら楽しい雰囲気での学習を行うことができた。
- 個別学習だけではなく、友達と一緒に学習を取り入れることでメリハリをつけることができ、集中力が持続した。
- ①の教材については、枠が広すぎてどこを書いているのか分からなくなり、筆順が迷路のようにバラバラになってしまった。本生徒の実態には合わない教材であった。
- 平仮名50音の読み書きの定着を図り、実際の生活で活用できるようにしていく。
- 単語の練習をし、一文字ずつではなくかたまりで読めるようにしていく。
- 生徒が飽きないよう、楽しく取り組める教材や授業づくりを引き続き行っていく必要がある。

## ② 話すグループ

### (ア) 研究のねらい

本研究グループの対象生徒は、簡単な単語を駆使して、ある程度の会話は成立させることができる。しかし、単語を羅列するだけの話し方や主客が転倒した話し方になり、聞き手が意図を想像し補いながら聞く必要がある。そこで、以下に挙げる指導で、より聞き手に伝わりやすい話し方の学習をすることで、コミュニケーション力の向上を目指した。

### (イ) 研究の内容

- 助詞を使った話し方の指導
  - a 単語の羅列から、助詞（は、が、に、を）を使って2語文、3語文にする。  
ステップ1：動作を表す絵カードを見て、何をしているところか、説明させる。  
ステップ2：「○○が、□□をする。」という、助詞を使った文に言い換えさせる。
  - b 市販の教材やフリーのイラストを用い、主語+助詞+目的語+述語の語順を意識させる。

	<p>&lt;ステップ1&gt; 絵カードを見て、説明させる。</p> <p>&lt;ステップ2&gt; 出てきた単語をつなげて、適切な助詞を空欄に当てはめさせる。</p>		<p>&lt;ステップ1&gt; 絵カードを見て、出てきた単語をつなげさせる。</p> <p>&lt;ステップ2&gt; 適切な助詞を空欄に当てはめさせる。</p> <p>&lt;ステップ3&gt; 主体と客体にあわせて「れる」「られる」を使い分け、当てはめさせる。</p>
---	--	--	---

### (ウ) 成果と課題

- 授業では「○○が、□□をする。」という話し方がスムーズにできるようになってきた。
  - 身近な人物を登場させることによって、話す意欲が高まった。
  - カードを操作することで、意欲的に取り組めた。
  - 授業中は意識して話をするが、日常生活で定着するには積み重ねが必要である。
  - 助詞はスムーズに当てはめられるようになってきたが、主体と客体にあわせて「れる」「られる」を使い分け、当てはめることはまだまだ難しかった。
- ※ 使用教材 かもがわ出版 「あそびっくす!まなびっくす!

### ③ 重複グループ

#### (ア) 研究のねらい

対象とした生徒の実態としては、

- 平仮名一文字ずつは読めるが二文字以上になると難しい。しかし絵を見て単語を言うことはできる。
  - 発語はあるが、語彙数は少なく会話が成り立ちにくい。
  - 音楽が好きで、童謡などの歌詞はよく覚えていて歌う。
- などが挙げられる。

そこで、生徒が好きな歌と視覚的な教材を組み合わせる学習することをおして、基本的な言葉の習得および定着を図ることとした。

#### (イ) 研究の内容

まず、生徒が好きな童謡「とんぼのめがね」をペープサートの教材として準備し、歌いながらことばを視覚的にも捉え、ことばと視覚教材を結びつけるようにした。次の段階として、平仮名で書かれた単語カードと視覚教材を結びつける学習を取り入れていった。



### (ウ) 成果と課題

- 好きな歌とペープサートの組み合わせで、スムーズに学習に入ることができ、楽しみながら学習を進めることができた。
- 歌いながら動きのある視覚教材を用いたことで、言葉の具体化、イメージ化がしやすくなったようだった。色、ぴかぴかなどのことばを覚え、定着しつつある。
- 童謡の歌詞には、現代ではあまり使われない言葉もあるため、生徒が戸惑う部分もあった。選曲や言葉の選択については、じっくり検討する必要がある。
- 言葉と視覚教材を結びつける段階でも得手不得手の傾向が見えてきた。言葉を覚えるプロセスについても、さらに詳しい実態把握をしていきたい。

## ウ 成果と課題

国語班での研究を、『読み書き』『話す』『重複』の3つのグループに分けたことで、焦点を絞り、それぞれの課題に合った研究や授業づくりを行うことができた。職員一人で授業内容を考えるよりも、グループ内の職員でいろんな考えや教材を提供しあったり話し合ったりすることで、楽しい教材・授業づくりができ、生徒にとって楽しく、身に付く学習となっていた。生徒がどこまでできるのかを見極めるのが難しく、さらなる専門知識や経験が必要である。

## (2) 数学班

### ア 研究のねらい

数学科では、「数と計算」「量と測定」「図形・数量関係」「実務」の観点から構成された内容を実際の生活場面で取り扱い、生活に生かしていく能力と態度を育てることを目標としている。

研究に先立ち、課題を検討したところ、実態把握の難しさ、生徒の実態差、積み重ねの困難さ、教材教具を作成する時間の確保、指導の方法の充実等多くの課題が挙げられた。

そこで、本研究では、生徒一人一人に応じた指導の充実を図るために、生徒個人またはグループに焦点をあて、教材教具や指導方法を工夫、改善することで、生活に生かせる数学の力を身に付けさせることができるのではないかと考え、ねらいを設定した。

### イ 研究の内容

- ① これまでの教材教具の整理と有効な活用
- ② 生徒の実態や取り組み状況の共有化
- ③ 生徒個人やグループ学習における教材教具、指導方法の工夫



【教材教具の整理】



【買い物学習の教材】



【かさの学習の様子】

## ウ 成果と課題

- これまでの教材教具の確認をし、使用しやすいように整理したことで、教材教具を共有し、活用をはかることができた。
- 他学年の生徒の実態や取り組み状況を知る機会となった。
- 指導・支援のあり方、生徒の意欲を高める教材の工夫などについて協議することができ、参考になった。
- 研究の回数が少なく、実践の報告や検討を十分に行うことができなかった。
- 習熟度別のグループ学習においても、実態の差があるため、より個に応じた支援・指導をするための教材・教具が必要である。
- 生活するために必要な数学の力とはなにかを焦点化し、具体的に取り組むまでには至らなかった。

- 学習したことを家庭でも取り組んでもらえるような家庭との連携の工夫が必要である。

### (3) 保健体育研究班

#### ア 研究のねらい

中学部の保健体育の時間は、単元によってはグループに分かれることもあるが学部合同の授業形態で行う場面も多い。生徒の実態に個人差がある学習集団において、生徒一人ひとりが楽しんで学習活動に取り組むことができているのかを検証し、学習形態や指導支援の手立てを工夫することで生徒一人ひとりが進んで取り組む保健体育の授業づくりをねらいとした。

#### イ 研究の内容

検証単元をフライングディスクに絞り、従来のフラッグベースボールの時間をディスクベースボールに変更することでフライングディスクを使用した活動時間を長く確保した。生徒のスキルに応じて3グループに分け、対象生徒をAはグループ全体、B、Cは各3名ずつに絞って検証した。なお、職員の人数調整のため通常学級（A・B）と重度重複学級（C）の2グループに分かれて研究を進めた。

##### (ア) 評価（楽しさ）の基準の確認

A・Bグループ	Cグループ
言葉での表現、聞き取り、選択、自らの取組、できるようになる、他者とのかわり	自らの取組（教材に手が伸びる、活動に参加）、嫌であれば取り組まない

##### (イ) 各グループでの取組

- A・Bグループ・・・全体の「流れ」、「手だて」、「評価」を検討
  - a 流れ・・・①目標確認 ②本時の流れ確認 ③体操 ④練習 ⑤発表 ⑥反省（振り返り）
  - b 手だて・・・アキュラシーゴールを見るための教材作成、動きの流れを文字と写真で示す、毎時間の記録や記録会での意欲付け、競技の応用（ディスクゴルフ、ドッジビー）、基本動作（キャッチ、スロー）の反復練習
  - c 評価・・・授業終わりに生徒のコメントを記録（A）、距離の測定とゴール枚数の記録を基にした振り返り（B）
- Cグループ・・・重度重複の生徒が楽しく取り組むための「手だて」、「評価」を検討
  - a 手だて・・・アキュラシーに絞った活動、投げることへの意欲付け（ポイントシール）、投げ入れるための共通教材、ゴールを見るための教材作成、音楽の工夫、活動場所の固定化
  - b 評価・・・実態に合わせた評価表の作成

#### ウ 成果と課題

- 同じ場所・流れで取り組んだことで、見通しを持って活動できた。（BC）
- 繰り返すことで流れ（投げる、拾う、戻る）を理解し、動くことができた。（ABC）

- 3年間の積み重ねでやることは分かってきている。1年生にとっては、時間を多く確保することで一通りの経験が積めた。(ABC)
- 同レベルの生徒と練習することでスピード感やフォームなどが整った。(ABC)
- ゴールに興味のある物(カード、人)を使うとよく見ることができた。(BC)
- かけ声でディスクを放せるようになった。(C)
- 毎時間の記録や記録会で、他の生徒に認められるきっかけとなり意欲の高まりがみられた。(B)
- 反省を受けて、改善が見られた。(A)
- 生徒によってやる気(喜びの質)が違う。(AB)
- 技術の高まりから、通常学級の生徒には物足りなさがあったかもしれない。(A)
- 好みのディスクを使うと自主的にできることが増えるかもしれない。(BC)
- アキュラシーゴールにネットを付けると分かりやすい。(C)
- グループごとに目標の確認・見直しが必要である。(C)
- ステージ上では狭かったので、広い場所で活動してもよかった。(C)

#### (4) 作業学習研究 農業班

##### ア 研究のねらい

中学部農業班では、これまで生徒一人一人の目標確認と評価の機会を学習活動の初めと終わりに毎時間設けることで、各生徒が目標意識をもちながら作業活動に取り組んでおり、生徒の作業態度の向上や勤労観の育成等において一定の成果をあげている。しかし、一方で、生徒一人一人の実態把握に職員間で違いがみられるため、評価の基準に一貫性がなく、共通した指導・支援がなされていない現状がある。また、これまでの生徒一人一人の目標設定が、抽象的な表記に偏りがちであったため、生徒の中には自己評価が難しい場面が見られたり、職員の間でも活動中の言葉かけや評価がしづらいという意見があげられたりしてきた。

そこで本研究では、以下の3つの取組を行い、生徒一人一人に達成感や成就感を味わわせることをねらいとした。

##### イ 研究の内容

- 生徒一人一人の取組状況や課題、または目標や支援方法、評価の基準の検討を行いながら職員間の共通理解を図る。
- 回数や個数等でより具体的な個人目標を設定し、生徒へ提示する。
- 必要に応じて目標の変更を検討し、生徒へ提示する。

##### ウ 成果と課題

- 生徒一人一人の取組状況や課題、または目標や支援方法、評価の基準を全職員で検討することで優先すべき課題や具体的な目標を選定することができ、より有効な支援方法を考えることができた。また、職員間で共通理解を図ることができ、どの職員も一定の評価基準をもとに支援に当たることができた。

- 回数や個数等による個人目標を生徒へ提示することで、生徒の目標への意識がさらに高まり、取組状況の変化も見られ、自己評価も明確になった。また、職員も具体的な言葉かけや客観的な評価ができるようになり、生徒が達成感や成就感を得られる機会も増えた。
- 目標達成等に伴って目標の変更を検討したことで、生徒の目標意識も高まり、生徒の様々な力を伸ばすことができた。
- 農作物を扱うことから長期的な計画（種まきから収穫まで）のもとに活動を行っているため、現在行っている活動が作物を育てる上でどの段階の活動に当たるのか、また、その作物が現在どの成長の段階であるのかが分かりにくく、生徒が見通しをもって活動することが難しい。
- 学習活動の初めと終わりに目標の確認や評価の機会を設けているが、それらに時間に費やし過ぎていることもあり、実際に活動する時間が十分に確保できないこともある。

## (5) 生活班

### ア 研究のねらい

中学部生活班は、1年2名、2年4名、3年5名、計11名の生徒で構成されている。今年度は、作業学習の時間において、グループ活動を取り入れて生徒同士が話し合いでその時間の目標を設定し評価をすること、また、自分たちで気づき、考え、支え合いながら達成感を味わうことにより、今まで以上に自主的に作業学習を進めていくことができるだろう、という仮説のもと研究を行った。

### イ 研究の内容

- 個別の指導計画を基にした、保護者の願いと生徒の課題の把握及び共通理解
- 生徒同士で目標を設定し評価をする、リーダーを中心としたグループ活動
- 目標と評価を意識させた生徒主体の作業学習の時間

### ウ 成果と課題

- 重複学級の生徒がグループ活動の一員となったことで作業学習に集中する時間が長くなった。
- グループ全体の目標を決めることで、作業内容に対する不平不満を言うことがなくなった。
- グループ活動をすると生徒の意識が高くなった。話し合いでは考えようとする態度が見られ、生徒同士の学び合い、助け合いが多くなった。
- グループ活動では、生徒同士が仕事のできあがりのチェックをするようになり、「やり直しをしてください」と生徒自らが言うようになった。
- 次の生徒に仕事を渡す時に、受け取る側のタイミングを待って「お願いします」と渡すことができるようになった。
- 生き生きとした表情で作業学習に取り組み、作業学習が大好きという生徒が多い。
- つまづいても「もう一度やってみよう」という態度が見られる。うまくできなくてもできるまで頑張っている。

- 給食着たたみなど、しばらくやらないと手順やコツを忘れる生徒への手立て・対策が必要である。
- 作業の量と作業の質についてアンバランスにならないような生徒への働きかけが大切である。
- 集中力を持続させるための、教材や教具の開発・工夫を継続していかなければならない。
- 今後、教師が意図的に支援を抜いていき、生徒同士が自ら進んで教え合い、助け合える作業学習になるようさらに工夫をしていく必要がある。
- 適切な評価のあり方について議論を深め、生徒のさらなる自主的な活動につなげられるように職員間の共通理解をはかりたい。

## (6) 窯業班

### ア 研究のねらい

中学部窯業班は、中1（6名）、中2（3名）、中3（5名）の14名で構成され、そのうち6名が重複学級の生徒である。1学期は粘土で成形と片付けの一連の流れに慣れることを目標に個人のペースに合わせて進めてきた。徐々に慣れたものの、集合時間や片付けに入る時間を考えると成形の時間が十分にとれなかった。作陶のスキルは身に付けていても、その時々 of 意欲次第では積極的に参加できない生徒がいた。また生徒が一人で作品を完成させるため、多くの支援が必要な場合があったり、言葉のやりとりをする機会が少なかったりした。そこで、「流れ作業」を導入して「それぞれの生徒に合わせた役割」を担わせることで、集団に貢献している実感をもたせられるのではないかと、またみんなで協力して皿作りや片付けをすることでコミュニケーション能力を養うことができるのではないかと考えた。

### イ 研究の内容

- 作陶や片付けの工程を「流れ作業」とし、生徒の特性に合わせた「役割」を設定して取り組ませる。
- 生徒の目標・成果・評価を視覚的に意識させながら取り組ませる。

### ウ 成果と課題

- 流れ作業にすることで、「自分の役割」が明確になり、「これが自分の仕事だ！」という意識が強くなった。工程の中の一つでも抜けると皿が完成しないため、自分の役割の大切さを認識し責任感をもつなど変化が見られた生徒がいる。
- 自分の仕事をいくつできたか、またみんなでいくつの皿を完成させたかをグラフによって視覚的に捉えることができるようになり、達成感を得ることができた。
- 次の工程に粘土を運ぶ際に、生徒同士の「おねがいします」や「はい」など、活動の中での言葉のやり取り（コミュニケーション）が増えた。
- 一つの作業を継続することで、作業が丁寧になり正確さが増え、技術の向上も見られるようになった。
- 作業内容を限定することで、職員もコツを伝えやすかったり、自分の担当以外の生徒についても声かけができたりと支援や評価がしやすくなった。

- 職員が生徒の実態を共通理解し、「実態に応じてどう支援を工夫すれば、少ない支援で生徒が進んで作業に取り組めるのか」について検討することができた。その結果、生徒一人一人に合った作業内容、教師の支援の方法を見つけることができた。
- 流れ作業を導入することで、待ち時間のある生徒がでてきたが、それぞれの生徒や仕事内容に即した仕事をみつけることで対応することができた。
- 流れ作業の中で一つの工程を担当するため、単純な作業の繰り返しになる。集中力が途切れてしまい、離席したり作業のスピードが落ちてしまったりしがちな生徒への支援をどのように行うかについてももう少し工夫が必要である。
- 生徒の実態を把握した上で、特性に配慮した座席配置や順番の改善をどのように行うかについて検討する必要がある。

## (7) 家庭班

### ア 研究のねらい

本年度の中学部家庭班は、1年生5名、2年生5名、3年生5名の15名で構成されている。昨年から生徒の実態に応じて2グループに分けて活動を行うことで、それぞれのグループで目指す姿が明確になったとともに、生徒自身にも目標を意識して活動する姿が見られるようになってきた。しかし、本年度はさらに実態の幅が大きく、より細かなグループ分け、グループに応じた目標の設定・評価、作業内容の精選等が必要となってきた。そこで、本年度の家庭班の研究課題「生徒が自発的に取り組む指導・支援の在り方」を目指し、以下のような取組を行った。

### イ 研究の内容

- 実態に応じたグループ分けと活動内容の設定
- 分かり易い授業の流れの工夫
- 具体的な個別目標の設定と、分かり易い評価の工夫

### ウ 成果と課題

- 生徒の実態に応じて3つのグループに分けて活動を行った。
- a バリバリ班～規格通りに製品を作り上げる。「正確な作業」を目標とする。
- b キラキラ班～好きな模様を生かしたものの作りをする。「丁寧な仕上がり」を目標とする。
- c ピカピカ班～袋詰めや回収などの大きな動きの活動をする。「てきぱき活動」を目標とする。
- 実態に応じてグループ分けすることで、それぞれの目指す姿がより明確になったとともに、生徒自身にも目的を意識して活動する姿が見られた。
- はじめの会・終わりの会の時間を短くし、各グループでグループの担当職員から活動内容について細かな説明をしたり、目標について確認したりする時間を設けた。生徒の取組を実際に確認しながら話をする機会が増え、細かな支援を行うことができた。
- 製品を作り上げた後に販売活動を取り入れた。製品作り→ラッピング→販売という流れを取り入れることで、買い手を意識して製品を作り、意欲につながった。

- 個別の目標をより具体的で肯定的なものにした。「丁寧に→縫い目の揃った」「てきぱき→何分以内に」などとし、客観的な評価へとつながった。
- 評価の際は◎○△を使って自己評価しているが、評価の基準が曖昧で、教師から言われて評価段階を選ぶ場面が多かった。生徒が自分の目標を意識して活動できるように、目標に反した行動をした場合に◎から○△と段々評価が下がっていくことを視覚的に提示した。自分の行動と評価が結びつくことで、行動の改善につながった。
- 生徒が意欲的に取り組む姿が多く見られるようになってきたが、自発的に取り組むにはまだまだ至っていない。役割分担の明確化や活動期間を設けることで、達成感を感じられるような工夫をする必要がある。
- 実態に応じてグループを編成していたが、活動内容によっては生徒同士が関わって高めあっていけるようなグループ編成があってもいいのではないかと考える。リーダーの育成を含めて、今後の課題としたい。

## (8) リサイクル班

### ア 研究のねらい

中学部リサイクル班は、本年度新設されたばかりの作業班なので、試行錯誤を繰り返しながらよりよい活動を求めて取り組んでいるところである。仕事の内容はペットボトルのキャップやラベルをはかずしてつぶす、アルミ缶をつぶす、牛乳パック開き・チラシゴミ箱づくりなど分かりやすく、取り組みやすい作業内容なので生徒も熱心に取り組んでいる。しかし、主体的に見通しを取り組むまでには至っていない。

そこで、班別の研究では「自分の仕事に主体的に時間いっぱい取り組む授業づくり」をねらいとして、そのための方策を研究してきた。

### イ 研究の内容

- 個別の指導計画を基にした実態把握及び共通理解
- 生徒の目標設定と支援の具体的方法
- 分かりやすい評価の工夫

### ウ 成果と課題

- 学年毎のグループ編成にしたので、生徒相互の理解が図れ、職員の掌握もしやすく効率的な活動ができた。
- 学期毎に生徒の目標を設定したので生徒の成長や課題に応じたものができた。また、設定時には前もって職員全員で検討したことで、共通理解を図ることができた。
- アルミ缶とペットボトルはコンテナ1箱、牛乳パックとチラシゴミ箱は10枚という仕事量の基準を設定したので、生徒に分かりやすくなり、グループまたは個人の目標設定では生徒自身で作業量の具体的な目標を立てられるようになった。評価では仕事量に応じたシールを貼り視覚的にしたことによって生徒に分かりやすくなり、生徒自ら目標に向けて活動する様子が見られることが多くなった。作業の途中では、一つの基準が終了する毎に報告をさせるようにすることでコミュニケーションを図れるようにした。

- ペットボトルを中心に活動する生徒のために、作業工程に沿った段ボールを3つ連結させたものを制作した結果、作業の流れが分かりやすくなりよりスムーズに取り組むことができた。
- アルミ缶とペットボトルは作業室外で活動したが、外用の時計を準備していなかったため、生徒にとっては時間の見通しが持てなかった。
- 作業内容が限られるので年間を通してほぼ同じ作業の繰り返しだったが、レベルアップを図れるような課題設定の工夫が必要な生徒も見られた。
- 準備・作業・片付けの各場面で、生徒同士で自ら進んで教え合い、助け合えるようなグループ編成や作業内容・場の設定など工夫していくことが大切である。

## 6 研究のまとめと今後の課題

先に述べたように、本校中学部は、入学者数の増加に伴い、障がいの多様化、複雑化が進んでいる。そこで、生徒の実態を共通理解し、実態に即した学習内容の見直しや工夫・改善を図った結果、次のような成果と課題が挙げられた。

- 年間指導計画の見直し・整理精選を行い、検証することで、各教科・領域の授業の充実が図れた。見直しに当たって、教務部、進路支援部、学年主任のメンバーで学部内研究推進委員会を立ち上げたことで、学部内の統一性や学年を追った系統性が見直しができた。今後は、これを柱に生徒の学習状況や実態差に合わせて、柔軟性をもたせながら活用を進めていきたい。
- それぞれの作業班の課題について検証し、生徒の実態や作業内容について協議する時間の確保ができた。それにより、生徒一人ひとりにとっての作業学習の在り方、作業内容や目標、評価の方法について研究を進めることができ、生徒がより主体的に活動する場面が増えた。
- 教育支援部と連携を図り、事例研修や職員のニーズに対応した研修会をおこなった。生徒の障がいの多様化、複雑化が進む中学部にとって、情報の共有や問題解決の糸口を探る貴重な時間となった。
- よりよい授業作りの手立てとして、「生徒の障がいの特性を共通理解した指導の必要性」および「教科・領域についての幅広い専門的研修の継続」を求める意見が挙げられた。
- 生活に生かせる学習やそのための教材教具の工夫、生徒が進んで活動しようとする自主性を高める環境の整備、家庭との連携など、将来の自立と社会参加に結びつけられる取組を今後も検証していく必要がある。

今回の研究は、生徒一人ひとりが進んで取り組む授業づくりを目指して進めてきた。年間指導計画の見直しを進めるに当たっては、学部、学年、教科、作業学習、通常学級と重複学級など、様々な形態での協議を行った。それによって、学部内の生徒それぞれについての実態把握や目標についての共通理解、支援・指導の在り方の共通理解が図られ、多面的に生徒を支援していくことができた。

また、平成21・22年度の研究で取り組んだ特別支援学校におけるキャリア教育についての学び直しや職員間の共通理解を図る取組として、研修センターからの研修サポートを受け、中学部における作業学習の在り方の検証をすることができた。これは、将来の自立と社会参加に向けた指導・支援の足がかりとすることができたと思われる。今後は、すべての教科・領域に行き渡る基盤作りを進め、それらの充実に努めたいと考えている。そして、小学部や高等部との連携を図りながら、引き続き、生徒一人ひとりに目を向けた指導や支援の在り方を検証していきたいと考える。

【引用・参考文献】

- 「特別支援学校中学部学習指導要領 第2節」（平成21年3月 文部科学省）
- 「特別支援学校学習指導要領解説 総則等編」（平成21年6月 文部科学省）

## 平成26年度 高等部研究班

### 1 高等部研究副題

『生徒の実態に合った効果的な課題別学習のあり方 ～新教育課程の創設と移行を目指して～』

### 2 副題設定の理由

高等部では、主題に迫るために、生徒がよりよい自立と社会参加を目指すためには何が必要かについて考え、「実態に合った効果的な課題別学習のあり方」の探求に取り組むこととした。

高等部における「効果的な課題別学習」とは、生徒それぞれの実態や発達段階によりあった学習活動を計画・実践することであると考え、これを通して、本校で設定した「共に生きる力（①健康体力②身辺生活力③余暇を楽しむ力④コミュニケーション能力⑤自己選択、決定力⑥働く力⑦経済生活への参加力⑧その他）」を育成することができると考えた。さらには、これら8つの力を総合的に身につけることで、集団生活の中で一人一人に合った形で社会に適応し、必要な支援を受けながら主体的に生活を営もうとする卒業後の姿を実現することができると考えた。

そして、これらの実践を通して、キャリア教育における「自主的主体的に活動する力」を、生徒一人一人の実態に即して育成していくことができると考え、本副題を設定した。

本校高等部の近年の入学状況を見た時、その実態が非常に多様化していることが大きな課題となっている。つまり、現在の通常課程・重複課程の2課程では生徒の実態に即した学習活動の展開が困難になってきている状況がある。

3年前からの学部会・教育課程検討会で、新課程の創設が話題となり、それぞれの課程の目指す生徒像や授業づくりを議論してきた。一昨年の研究で、全ての過程の目指す生徒像や目標を明確にし、時間割と年間指導計画の改善を図ることができた。また昨年は、高等部3年生で取り組んだ、仮想Ⅲ課程クラスの検証や作業学習の全体的な見直し、「みや中央実態調査」の検証と、データの一つとなる国語と数学の問題作成と検証、Ⅲ課程に新設する「職業」と「道徳」の検証授業の実施、年間指導計画に基づいた各教と教科・領域を合わせた指導の検証授業の実施、指導案・教材作成等を行い、成果を上げることができた。これらをふまえ、今年度は、

- 各教育課程の検証
- 評価基準表の作成
- 「みや中央実態調査（国語・数学）」の見直し
- 新設作業班の年間指導計画の見直し、教材作成、環境整備
- 「道徳」「性教育」の資料・指導案集の作成

これらに取り組むことを目標とし、3ヵ年研究の集大成とした。

### 3 研究の仮説

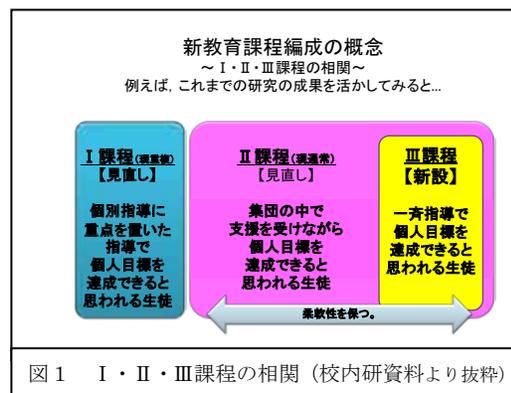
「共に生きる力」の構造をもとに、生徒一人一人の実態により合わせた新教育課程を創設し指導内容の工夫・改善を図れば、集団生活の中でそれぞれにあった形で社会に適応し必要な支援を受けながら主体的に生活を営もうとする自主的主体的な力の基礎につながるであろう。

#### 4 研究の経過

学期	研究の内容
1 学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本年度の研究全般について【研究推進委員会・全体研】</li> <li>○ 高等部研究班における研究内容と班をメンバー構成の決定</li> <li>○ 各班での研究</li> </ul>
夏季休業	○ 各班での研究
2 学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 中間報告会</li> <li>○ 各班での研究</li> </ul>
3 学期	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学部内発表・協議</li> <li>○ 全体研究（校内発表会）</li> <li>○ 研究のまとめ・次年度への引き継ぎ事項の整理</li> </ul>

#### 5 研究の内容

- 各教育課程の検証
- 評価基準表の作成
- 「みや央実態調査（国語・数学）」の見直し
- 新設作業班の年間指導計画の見直し、教材作成、環境整備
- 「道徳」「性教育」の資料・指導案集の作成



(1) 「I 課程の検証研究」班

ア 研究のねらい

新教育課程 2 年目となり、I 課程の検証班としても 2 年目を迎えることから、昨年度の I 課程の検証班の課題解決に向けた取り組み、そして、新教育課程と旧教育課程の指導支援体制を比較しながら i ii iii の教育課程の検証に、取り組むこととした。

イ 研究の内容

① 重複学級における総合的な学習の時間について

昨年度も、重複学級における総合的な学習の時間の時数や内容については、研究内容の 1 つとして取り組んだ。しかし、学部への正式な提案の手順をふまず、研究の成果を教育課程へ反映できなかった。その反省から、改めて次の内容に取り組み、学部へ提案することとした。

(ア) 県内の他の支援学校の総合的な学習の時間の時数および内容の調査

(イ) 学部への時数と内容の提案

(ウ) 指導計画の作成

② i ii iii の課程について

新教育課程になり 1 年を経過していなかった昨年度は、検証するには、指導支援の実績が十分ではなかった。本年度、2 年生は新教育課程を 1 年余り経験し、1 年生は、2 年生の重複学級とは生徒の実態が異なる面があり、そして、3 年生は旧教育課程 3 年目を迎えている。そこで、現時点で検証できる次の内容について取り組み、研究を進めることとした。

(ア) i ii iii の呼称

(イ) 学級編成

(ウ) 時数

ウ 成果と課題

① 成果

(ア) 総合的な学習の時間について、I 課程の検証班から学部へ提案をすることができた。(学部会において、取り扱う内容は 2 学年の修学旅行、時数は 2 5 時間との結論に達した。)

(イ) 重複学級における、総合的な学習の時間の指導計画を作成することができた。

(ウ) i ii iii の課程の呼称について、i が自立活動の多い課程、iii が生活単元学習の多い課程に改めることを、学部へ提案することができた。(I も i も、自立活動が多い課程となる。)

(エ) 1～3 学年の重複学級を担当する職員による研究の時間をもてたことは、授業の進め方や指導支援をする上で参考になることが多く、また、情報交換の場としても、大変有意義な時間となった。

② 課題

(ア) 指導支援体制をよりスムーズにするためにも、重複学級の教育課程を i ii iii に分けたことや、学級編成の時に協議したことを、3 学年まで確実に引き継ぐことが必要である。

(イ) 限られた環境(職員体制や時間割など)の中で、より高い教育効果を目指すために、自立活動と生活単元学習を合わせた 9 時間の運用を、年度当初に確認することが大切。

## (2) 「Ⅱ課程検証」班

### ア 研究のねらい

今年度より、高等部1・2学年は新教育課程で実施することとなった。そのため、高等部2年Ⅱ課程では、生活単元学習が1年時より2.5時間増え、週4.5時間となり、その分国語と数学が1時間ずつ減り週1時間ずつの授業となった。そこで本研究では、生活単元学習を中心に、昨年度立てた年間指導計画の検証と見直しを行い、成果と課題をまとめ、来年度に活かしていきたいと考える。

### イ 研究の内容

- ① 昨年度の年間指導計画の検証
- ② 年間指導計画の見直し

### ウ 成果と課題

- ① 昨年度の年間指導計画の検証

- (ア) 1年は生単が少ないのではないかと一部から声も上がったが、計画より実施時数は多かった。
- (イ) 2年は時間割の組み方の問題や、国語・数学の時数が少ないのでは等の意見があった。
- (ウ) 各学年共通して言えることは、生単は計画より時数がオーバーしているが、国語・数学は時数が少なかった。
- (エ) 「あたらしいほうりつの本(26年度をもって廃刊となった。)」を生徒の実態によっては、1年から配布してもよいのではないかと意見があった。
- (オ) 生単は学級指導が基本であると思うが、内容によっては実態別にグループ編成をして授業を行う方が効果的な指導ができる場合もあるので、学年で弾力的に指導形態を工夫するとよいのではないか。

- ②生活単元学習年間指導計画の見直し

- (ア) 各単元の見直し(学習内容と目標)
- (イ) 追加単元、学習内容(国語的・数学的内容)の検討
- (ウ) 追加単元では、現2年で、2.5時間増えた時数の1.5時間を利用して年間指導計画を作成し「生活の課題を克服しよう」の単元を行った。その小単元は1学期後半が「余暇の過ごし方」、2学期後半と3学期は「課題解決に向けて学習しよう」を行った。内容は「乗り物学習」「買い物学習」「テーブルマナー学習」「余暇学習」を設定し、グループ編成をして指導をした。
- (エ) 教科書「私たちの進路」の見直し
- (オ) 教科書「あたらしいほうりつの本」の取り扱い方

- ③次年度の課題

- (ア) 各教科や合わせた指導(生単など)の授業時数の調整
- (イ) 時間割の組み方
- (ウ) 年間指導計画の検証

本研究を通して感じたことは、各学年で課題を明確にし、生活単元学習の指導形態(TTやグループ編成、時間割)、指導内容などを今年度中に話し合い、各学年での弾力的な運用が大切であると感じた。新年度になると職員も変わるので、生徒を良く知る今年度中に来年度の年間指導計画や運用が話し合えると新年度スムーズな授業展開ができるのではと思う。

(3) 「新教育課程全般に関する検証」班

ア 研究のねらい

新教育課程を実施する上での問題点を考え、その改善策を検討し、より良い実施を目指して研究を行うことにした。

- ① 試行学年での検証から「教育課程選択、決定までの過程・手順」を改訂する。
- ② 新教育課程についての生徒・保護者向けの説明の在り方を提案する。
- ③ 新教育課程を実施する上での職員の共通理解を図る。

イ 研究の内容

- ① 「教育課程選択と決定までの手順」の見直しと改訂
  - (ア) みや中央実態調査実施・結果集約に関する計画・調整
  - (イ) 実力テスト、作業見学などの実施時期・方法の提案（数学班、国語班、作業班との連携）
- ② 生徒に対する教育課程オリエンテーションの内容・方法の検討と実施
  - (ア) 各課程の目標・授業内容・特徴の整理、説明資料作成
  - (イ) 高等部における教育課程実施についての共通理解
- ③ 授業時間割における問題点の改善と新教育課程実施に向けたシミュレーション
  - (ア) 合同学習の見直し(始業式、終業式等の合同生単をⅢ課程は特別活動に変更)
  - (イ) 平成27年度時間割モデルの作成

ウ 成果と課題

内容①について

成果： 「教育課程選択と決定までの手順」を高等部全職員に提示することで、見通しを持って、それぞれの立場から取り組むことができた。

内容②について

成果： 作成した資料を基に1年生だけではなく、2年生に対しても教育課程のオリエンテーションを行った。各課程の目標や内容を確認することができた。

課題： 各課程をランク付けしない、「上げる」「下げる」等の言葉を使わない、一人ひとりに合った教育課程と認識することが大切である。全生徒・保護者・教員が共通理解して取り組むためには、毎年繰り返し、確認する時間設定が必要である。生徒の実態と保護者の思いが異なっている時の説明の仕方には、工夫や改善が求められる。

(4)「国語」班

ア 研究のねらい

昨年度から実施された「みや央実態調査」(国語)の見直し・検討・改善を、生徒の「書く」「読む」の実態の評価を適切に行い、授業や日常生活、客観的な評価が必要な際に活かすことを目的とし行うこととした。

イ 研究の内容

- ① みや央実態調査(国語)の見直し・検討・改善  
(見やすさ、問題配当数、時間配分、問題提示の工夫、実施方法、評価基準)
- ② 実態調査の採点、結果の分析

ウ 成果と課題

① 成果

(ア) 内容①について

- 字体を統一(タイトル部分:ゴシック体、問い部分:明朝体)したり、回答欄に罫線を入れたり、すべての用紙に氏名記入欄を設けたりすることで、より問題を見やすく、管理しやすくすることができた。
- 前年度の問題数を見直し2パターン(A・B)に分け、問題数を減らしたことで、調査を行う時間を全体的に短縮(100分→65分)でき、1日で実施することが可能となった。(第1回20分→10分、第2回30分→15分、第3回20分→10分、第4回40分→30分)
- 「3書くー5 体験や事実と、感想をまぜながら文章を書く。」に含まれていた「3書くー7 自分の書いた文章の誤字、脱字に気付き訂正する。」の項目に応じた問題を作成したり、「2読むー2 促音、長音、濁音、半濁音の入った言葉や文章を読み、意味がわかる。」の問題を選択式にしたり、問いの表現を具体的にしたりすることで、問う内容が明確になり、項目に適した解答か否かが判別しやすくなった。
- A・Bの2パターンに加え、新たにCパターンの問題を作成したことにより、各学年において、それぞれ異なる問題に取り組むことが可能となった。
- 「3書くー5」(作文)については、担当が各学年につき一人で採点を行ったことにより、今後評価する際の視点を明確し、提示することができた。

(イ) 内容②について

- 生徒の得意な分野と苦手な分野、学年ごと、課程ごとの相違が明確になった。
- 「3書くー4」(メモ)、「3書くー5」(作文)について、今後の指導に活かすための具体的な方法を提示できた。(5W1Hの視点でのメモの仕方の指導、作文の「問いに答える」「具体的に記述する」ことに重点をおいた指導の仕方)

② 課題

(ア) 内容①について

- 各学年の実態に応じた3パターンの問題で実態調査を実施するか否かを検討し、また、来年度以降のみや央実態調査の運用の仕方について、学部で検討・共通理解を図る必要がある。

(イ) 内容②について

- 提示した方法を定着させるために、機会があるごとに問題提起すること。

(5) 「数学」班

ア 研究のねらい

生活に必要な計算や数量、図形など実生活に則した数学的思考や知識の定着を目指し、理解が深まる授業を推進するため、本校生徒の実態を把握することのできる問題を作成し、数学を活用する能力と態度を育てる。

イ 研究の方法

特別支援学校学習指導要領数学の目標と内容および文部科学省著作教科書を参考に、みや中央実態調査の分類に基づき、「数量と基礎・数と計算」、「量と測定」「図形数量関係」「実務」の各領域の問題を作成し、一斉テスト形式で数学の研究を実施した。

ウ 研究の内容（みや中央実態調査の分類より）

① 「数量と基礎・数と計算」

(ア) 3位数、4位数を数える。(イ) 3位数、4位数を書く。(ウ) 2位数、3位数、4位数の大小がわかる。(エ) 3位数で繰り上がりのある足し算をする。(オ) 3位数で繰り下がりのある引き算をする。(カ) かけ算の意味を知っている。(キ) 割り算の意味を知っている。

② 「量と測定」

(ア) 定規を使い、cm、m を読む。(イ) はかりを使って、g、kg を読む。(ウ) 体温計を使って、自分の体温を正確に読む。(エ) 1分単位の時刻の読み方をする。(オ) 時間の計算をする。(カ) あと何分、あと何時間で何時何分か分かる。(キ) 交通機関の時刻表の読み方がわかる。(ク) カレンダーを使って見通しをもつ。(ケ) ペットボトルや缶ジュースなどの大きさとよく使われる容積がマッチングできる。

③ 「図形数量関係」

(ア) 直角、三角形、四角形、円を理解する。(イ) 位置関係を理解する。(上下、前後、左右) (ウ) 前から(後ろから、右から、左から、上から、下から)何番目を理解する。(エ) いろいろなグラフの見方がわかる。(棒・円) (オ) 生活の中でグラフを書き、活用する。

④ 「実務」

(ア) いろいろな種類のお金を使って、予算の範囲内で買い物をする。(イ) 計算機を活用する。(ウ) 所要時間を考えて出発時刻を見通す等、予定をたてる。(エ) おこづかい帳をつける。

エ 研究の成果と課題

今年度は実施日を1日間に設定し、すべての分野のテストを実施した。受験した生徒は緊張感をもって取り組むことができた。1年生は入学後初めての調査で、生徒の実態把握する絶好の機会となった。2年生では、修学旅行や校外学習に向けた「時刻表の見方」や「お金の計算」の分野で事前事後学習の成果がみられた。3年生では、生徒の苦手分野が把握でき、卒業までに身に付けさせたい力を再検討する機会となった。全体的に、文章問題での問い方、図の表し方が変わると正解率が下がる傾向が目立った。生徒によっては時間配分が難しく、最後まで問題を解き進めることができないものもみられた。今後さらに問題の精選と実施計画の見直しが必要と思われる。調査結果をもとに、数学の授業改善や授業計画の参考資料として活用されることを期待する。

(6) 評価基準表作成「美術科」班

ア 研究のねらい

- ① キャリア教育に対して美術教科として特に効果のある分野を明確にすること。
- ② そのための教材作成や授業の進め方を明確にすること。

イ 研究の内容

- ① キャリア教育における基礎的・汎用的能力の各項目に美術科の編成基準を当てはめる作業を行う。
- ② 本校における美術教科の客観的な評価基準の作成

ウ 成果と課題

① 成果

- (ア) キャリア教育における基礎的・汎用的能力の各項目に美術科の編成基準を当てはめる作業の中でとくに集中するのは、人間関係形成・社会関係形成と課題解決能力である。
- (イ) 各学年に教科専門が配置されて二年目である。体制作りがようやくできた。
- (ウ) 指導例を集めることができた。
- (エ) 美術クラブが設立され、学校教育としての造形活動と余暇の一環としての造形活動を幾分分けて行うことができるようになった。

② 課題

- (ア) 本校における、教育課程の問題として授業時間が連続する学級と断続する学級が並立していることで授業の進路をそろえることが容易でない。

(7) 評価規準作成班（音楽）

ア 研究のねらい

評価規準表の作成及び音楽科の個別の指導計画で活用することにより、指導のポイントを明確にするとともに、高等部3年間の年間計画における系統性のある指導と、生徒一人一人の実態に応じた学習内容及び支援の工夫を目指すものとする。

イ 研究の内容

① 音楽科評価規準表の作成及び活用（資料1）

作成にあたっては、「音楽の学習内容」「評価の観点」をもとに3項目にまとめ、本校高等部「身につけたい力」を参考に3段階に整理した。また、キャリア教育との関連性についても表記等の検討を行った。

② 教材教具の工夫と表現活動の充実

(ア) 楽曲の情報交換

(イ) 授業の公開（資料2）

(ウ) 授業公開及びワークショップの活用

ウ 成果と課題

① 評価規準表を個別の指導計画に生かすことで、具体的な目標設定と評価につながった。

表現活動の内容が、歌唱、器楽、身体表現のいずれかが分かるようにするために、評価の記載の仕方を工夫する必要がある。

(例)

目標	手立て	評価
<b>【表現活動】</b> 支援を受けて演奏に参加する。（段階Ⅱ-C）	合奏活動において、役割を明確に提示すると共に、互いの演奏を聴き合える場面を設定する。	<b>【表現活動】</b> 鍵盤ハーモニカを担当し、教師の指示や周囲のテンポを確認しながら演奏することができた。
<b>【鑑賞】</b> 音楽を聴いて楽しむ。（段階Ⅰ-H）		<b>【鑑賞】</b> アニメやテレビ番組で使われている曲に関心を持ち、口ずさむことができた。

② 支援の在り方について、段階が分かりやすく T1 以外の職員も支援の参考になる反面、ねらいに応じた支援や自発性を促す支援なされるためには、「支援を受けて」という表現の解釈のより明確な共通理解を図る必要がある。

③ 評価規準表の活用により指導のポイントが明確化され、指導計画や楽曲の選び方等、実態に応じた学習内容の工夫につながった。今後は、自主性・自発性の評価について、高等部学年間及び学部間の系統性について等、見直しや検討を進められるとよい。

表 1 : 音楽評価基準表

	3段階	2段階	1段階	ア	イ	ウ
表現活動				A 音楽を感じる。		○
		C 支援を受けて演奏に参加する。		B 学習に参加する。	○	○
		E みんなの演奏に声や音を合わせ、他者の音や演奏を感じる。		D 声を出したり楽器を鳴らしたりする。	○	
		F 全体の演奏に参加して楽しむことができる。			○	
		H 自分の演奏での役割を知る。		G. 自分の演奏する楽器を知る。	○	
		J 自分の演奏での役割を感じ理解する。		I 自分の楽器を鳴らす。	○	
	K 自分の役割を感じ、理解して、演奏の工夫ができる。					
	L 秩序に従い、他人と協力して活動し、リーダーシップがとれる。				○	○
	M 他の楽曲、音楽への興味関心を持ち表現する。					
	N 自分で好きな音楽を選択して、鑑賞したり歌ったり楽器を演奏したりする。				○	
鑑賞活動				A 音・音楽を感じる		○
				B 音楽が流れる空間で過ごす		○
				C 音・音楽に気づく		○
		E 好きな音や音楽を楽しむ		D 好きな音や音楽が分かる	○	○
	G いろいろな音楽に興味・関心を持つ					○
	J いろいろな音楽の特徴を味わいながら鑑賞する			H 音楽を聴いて楽しむ		○
	K 自分で好きな音楽を選択して、鑑賞する				○	○
				A 音・音楽に気づく。		○
				B 音楽の特徴がわかる。		○
		D 楽しんで活動に参加する。		C 支援を受けて活動に参加する。	○	
興味関心	E 積極的に活動に参加する。					○
	F 他の楽曲に興味をもって楽しむことができる。					○
	H いろいろな機器を使って音楽を楽しむことができる。					○
	G 再生機器を使って音楽を楽しむ。				○	

キャリア教育との関連 (ア：人間関係形成・社会形成能力 イ：自己理解・自己管理能力 ウ：課題対応能力 エ：キャリアプランニング能力)

## (8) 家庭科研究班

### ア 研究のねらい

知的障がいのある生徒の家庭科教育は、いかにあるべきか。

### イ 研究の内容

- ① 家庭科評価基準表の作成
- ② 授業に役立つ教材研究（教材作成及び情報交換）

### ウ 成果と課題

#### ① 家庭科評価基準表の作成

家庭科の指導内容をキャリア教育の視点で分類をした。家庭科の指導内容は、衣食住全般にわたり、多種多様で、すべて社会的自立に直結したものであることが確認できた。これらの知識、技能は、キャリア教育の項目の中の課題対応能力として実習を通して定着し、日々の生活において、実践する力を養うことができる。従って、今後も、高等部の教育課程において、生活単元学習ではなく家庭科の教科として独立して、系統的に指導するほうが、効果的であると考えた。また、評価をする上で、明確な指標ができたので、実際に活用しながら、改善し、今後の指導に役立てていきたい。

#### ② 授業に役立つ教材研究

##### (ア) 教材製作

高等部2，3年で取り組む、保育や家庭看護は、知的障がいのある子ども達にとって、妊産婦や高齢者に接する機会がないとイメージをするのが困難である。そこで、疑似体験ができる簡易用具を作成した。これまでは、佐土原保健所や佐土原福祉事務所等で借用していたが、本校の備品として保管し、いつ、だれでも計画的に活用することができるようにした。

##### (イ) 情報交換

各学年のアイデアあふれる授業の実際を写真等で情報交換し、実生活に役立つ授業のあり方についてヒントを得た。高2では、保育において、赤ちゃん人形に加え、実際に乳幼児と子ども達がふれあう場面を設定したり、災害時の準備について非常食を試食したりする取り組みがなされた。高3の衣生活では、自分の足のサイズを知り、靴下を学校周辺のスーパーで購入したり、TPOを考えた日常着（生徒）や式服（先生）のファッションショーを実施したりした。生徒の興味関心があり、実生活に密着した教材を用いて、主体的な活動を引き出す楽しい授業の実践が大変参考になった。

#### ③今後の課題

指導にあたっては、題材の精選や生徒の実態に応じたグループ編成、指導形態（総合的な学習の時間の利用、指導者数）等を工夫していく必要がある。そして、今回作成した評価表を活用、改善しながら、指導のあり方をきめ細かく研究していくことが課題である。

表 1 : 家庭科評価基準表No.1

家庭科基準評価表

No.1

	3 段階	2 段階	1 段階	A	B	C	D
家庭生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>家族とのふれあいや団らんを楽しくもてるよう、考えたり自分なりに工夫する。</li> <li>礼儀正しく訪問したり、適切に来客の対応をしたりする。</li> <li>家庭の仕事を担当し、家族の一員としての役割を果たす。</li> <li>余暇や休日の計画を立てて、有意義に過ごす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>家族団らんを楽しむ。</li> <li>訪問したり、来客の対応をしたりする。</li> <li>家庭内における仕事の手伝いをする。</li> <li>スポーツ、音楽、飼育、栽培などの趣味を持ち、生活を楽しむ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>家族の団らんに参加する。</li> <li>訪問先の方や来客者に挨拶をする。</li> <li>家庭内の仕事を支援されながら手伝う。</li> <li>テレビ、音楽、ゲームなどをしながら余暇や休日を楽しく過ごす。</li> <li>男女の違いがわかる。</li> <li>乳幼児や高齢者とふれあう。</li> </ul>	○			
保育	<ul style="list-style-type: none"> <li>結婚、妊娠、出産の意味を理解する。</li> <li>乳幼児とふれあい、乳幼児の生活や発達などに興味・関心を持つ。</li> <li>家族の疾病や介護の必要な高齢者の生活を理解し、援助する。</li> <li>簡単な家庭看護用品を正しく使う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>結婚、妊娠、出産について知る。</li> <li>乳幼児や高齢者に優しく接する。</li> <li>家族の疾病や介護の必要な高齢者の生活を知る。</li> <li>簡単な家庭看護用品の種類がわかる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>乳幼児や高齢者とふれあう。</li> <li>療養中の家族や介護の必要な高齢者に優しく接する。</li> <li>支援されながら簡単な家庭看護用品を使う。</li> <li>支援されながら戸締まりをする。</li> </ul>	○			○
住居	<ul style="list-style-type: none"> <li>防災ベル、火災報知器、消火器などの正しい取り扱い方を知る。</li> <li>災害に対する日ごろの備えや、避難方法などを知り、備えを知る。</li> <li>部屋の換気、採光、照明を考え快適な住まい方を工夫する。</li> <li>照明器具、冷暖房器具などの手入れの仕方を知る。</li> <li>定期的に丁寧な整理整頓や掃除を行い、気持ちの良い住まい方を工夫する。</li> <li>住まいの簡単な手入れや室内の飾り付けをする。</li> <li>使用目的に応じて掃除用の洗剤、殺虫剤等を安全に扱う。</li> <li>生活の中でゴミを減らす工夫をしたり、リサイクルしたりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>火事、地震、台風、洪水の時は、適切に行動する。</li> <li>部屋の換気、採光、照明の仕方を知る。</li> <li>照明器具、冷暖房器具を使用する。</li> <li>自分の持ち物を整理整頓する。</li> <li>家庭内の整理整頓や清掃用具、掃除機などを使って住居を清潔にする。</li> <li>掃除用の洗剤、殺虫剤等を安全に扱う。</li> <li>指示に従ってゴミを分別する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>火事、地震、台風、洪水などの緊急な時は、指示に従って行動する。</li> <li>部屋の照明をつけたり、消したりする。</li> <li>照明器具、冷暖房器具を支援されながら安全に使用する。</li> <li>支援されながら自分の持ち物を整理整頓する。</li> <li>支援されながら清掃用具、掃除機などを使って住居を清潔にする。</li> <li>掃除用の洗剤、殺虫剤等を支援されながら安全に扱う。</li> <li>支援されながらゴミを分別する。</li> </ul>	○	○	○	○

キャリア教育との関連 A : 人間関係形成・社会形成能力 B : 自己理解・自己管理能力 C : 課題対応能力 D : キャリアプランニング能力

家庭科基準評価表

表 2 : 家庭科評価基準表No.2

No.2

	3 段階	2 段階	1 段階	A	B	C	D
消 費 生 活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予算をたてて生活し、計画的に貯金をする必要性を理解する。</li> <li>・現金購入、分割購入やクレジットカード、キャッシュカードの利用の仕方を理解する。</li> <li>・レシート、領収書などの内容を読み取り、家計簿に記録する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・無駄使いをしないで、計画的に買い物や貯金をする必要性を知る。</li> <li>・現金購入、分割購入やクレジットカード、キャッシュカードの利用の仕方を理解する。</li> <li>・こづかい帳に記録する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援されながら買い物や貯金をする。</li> </ul>				
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・衣類の取り扱い表示を見て、適切な日常着の洗濯をする。</li> <li>・季節・気温に応じた衣類などの整理や保管をする。</li> <li>・衣類の取り扱い表示を見て適切にアイロンをかける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・洗濯用具、器具、洗剤の使い方が分かり、簡単な日常着を洗濯する。</li> <li>・衣類などの整理や保管の仕方が分かる。</li> <li>・簡単なものにアイロンをかける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援されながら洗濯用具、器具、洗剤等を使い、簡単な日常着を洗濯する。</li> <li>・支援されながら衣類などの整理や保管をする。</li> </ul>				
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いつも清潔な衣服を着る。</li> <li>・季節、気温に応じた服装を着る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・衣類の清潔を保つことが分かる。</li> <li>・季節、気温に応じた服装を着ることが分かる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援されながら清潔な衣服を着る。</li> <li>・支援されながら季節、気温に応じた服装を着る。</li> </ul>				
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身だしなみを意識しながら自分で身なりを整える。</li> <li>・TPOに応じた服装や自分の体に合った衣類を着る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で身なりを整える。</li> <li>・TPOに応じた服装や自分の体に合った衣類を選ぶことを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援されながら自分で身なりを整える。</li> <li>・支援されながらTPOに応じた服装や自分の体に合った衣類を着る。</li> </ul>				
被 服	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要に応じ、クリーニング店やコインランドリーを利用できる。</li> <li>・1人で衣服の簡単な補修ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリーニング店やコインランドリーを知ることができる。</li> <li>・布、針、糸を使って基礎縫いができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援されながら布、針、糸を使って基礎縫いができる。</li> <li>・支援されながらミシンを使って縫う。</li> </ul>				
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・型紙に合わせて裁断し、小物や袋物を作る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単な手芸作品を作る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援されながら手芸作品を作る。</li> </ul>				

キャリア教育との関連    A : 人間関係形成・社会形成能力    B : 自己理解・自己管理能力    C : 課題対応能力    D : キャリアプログラミング能力

家庭科基準評価表 No.3 : 家庭科評価基準表No.3

		3 段階	2 段階	1 段階	A	B	C	D
食 物	<ul style="list-style-type: none"> <li>食品の洗い方、切り方、加熱の仕方、味のつけ方を工夫し、手順よく調理をする。</li> <li>調味料を計量して使う。</li> <li>調理器具の手入れ、管理をする。</li> <li>電気器具、ガス器具、石油器具を安全に取り扱う。</li> <li>効率を考えて、食事の準備や後片付けをする。</li> <li>盛りつけや配膳を工夫し手順よくする。</li> <li>レストランにおいて、予算や栄養を考えて自分で注文し、マナーを守って楽しく食事をする。</li> <li>栄養素及びその働きを知り、いろいろな食品を組み合わせて献立を作る。</li> <li>様々な食品表示の情報に注意して食品を選ぶ。</li> <li>食中毒について知り、食品衛生に注意する。</li> <li>冷蔵庫、冷凍庫など適切に使用し、食品の保存管理をする。</li> <li>価格や鮮度を考えて材料を取りそろえる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>食品の洗い方、切り方、加熱等の調理をする。</li> <li>献立に見合う調味料を使う。</li> <li>調理器具の種類と用途が分かり、安全に扱う。</li> <li>電気器具、ガス器具、石油器具の扱いに慣れる。</li> <li>食事の準備や後片付けをする。</li> <li>量を考えて器に盛りつける。</li> <li>レストランでメニューを見て料理を選び、マナーを守って楽しく食事をする。</li> <li>簡単な日常食の献立を作る。</li> <li>製造年月日、消費期限、賞味期限などを見て、新鮮な物を選ぶ。</li> <li>食品、食器などの衛生に気をつける。</li> <li>冷蔵庫、冷凍庫の使い方について知る。</li> <li>献立に合わせて、必要な材料の買い物をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>食品の洗い方、切り方の支援をされながら、簡単な調理をする。</li> <li>主な調味料を知る。</li> <li>電気器具、調理器具などを支援されながら安全に使う。</li> <li>支援されながら食事の準備や後片付けを手伝う。</li> <li>支援されながら盛りつけや配膳をする。</li> <li>レストランで支援されながら楽しく食事をする。</li> <li>簡単な食品名や調理名が分かる。</li> <li>食品の買いについて分かる。</li> <li>支援されながら食品、食器などの衛生に気をつける。</li> <li>支援されながら冷蔵庫、冷凍庫を使う。</li> <li>支援されながら献立に合わせて、材料の買い物をする。</li> </ul>					

キャリア教育との関連 A : 人間関係形成・社会形成能力 B : 自己理解・自己管理能力 C : 課題対応能力 D : キャリアプログラミング能力

(9) 評価基準作成：職業班

ア 研究のねらい

- ① 「水曜日の午後の作業」の時間等に2～3年生が合同学習して効果を高める単元の設定について、試行的に検証授業を行い、年間指導計画に定着させられるようにしていきたい。
- ② 各学年で指導したい内容や卒業生の課題例をもとに「つきたい力」焦点化し、評価基準表の作成ならびに精選を図った題材設定を年間指導計画に位置づけていく。

イ 研究の内容

- ① III課程クラスでの2～3年合同の検証授業を行う。
- ② 授業の内容設定（追加項目の検討や精選）についての協議し、昨年試作した「職業」の年間指導計画（2年生・3年生）の修正、改良を図る。
- ③ 評価基準表の作成を行う

ウ 成果と課題

検証授業は題材と時間が限られていたため、「就職面接会」への対策的な取り組みの検証となくなってしまった。2～3年合同での授業を組んだことで、2～3年生お互いにみられているという意識もあり、緊張感をもって取り組むことができていた。

I C T機器（タブレットなど）を利用して、授業中にすぐに振り返るようにしたので、生徒自身、よかった点や課題点など理解することができていた。

年間指導計画の修正、改正については、昨年度より課題に挙げられた「一人暮らしをしていて病気になった時どうするか」「お金と交友関係」といった想定学習について、生徒の実態を考えながら、改訂を行った。また、キャリア教育の4領域の視点を明確にした指導が行えるよう、指導内容の横にその項目を表記する欄を設けた。

評価基準表の作成については、昨年度の本校作業班作成の評価基準表や東京都立特別支援学校教育課程編成基準・資料等をもとに、作成を行った。3段階による評価基準表とし、目指している内容や評価の基準が明確になるようにした。

課題点としては、扱っている内容について、道徳や家庭、数学など他の教科の内容と似ているものについて、今後、整理、検討していく必要がある。

\* 参考文献

- (1) 『知的障害・発達障害の人たちのための見てわかる社会生活ガイド集』  
「見てわかる社会生活ガイド集」編集企画プロジェクト編著 ジアース教育新社
- (2) 『あたまと心で考えよう SSTワークシート思春期 編』  
『あたまと心で考えよう SSTワークシート自己認知・コミュニケーションスキル 編』  
『あたまと心で考えよう SSTワークシート社会的行動 編』  
3冊ともに LD発達相談センターかながわ 編著
- (3) 『知的障害・発達障害の人たちのための見てわかるビジネスマナー集』  
「見てわかるビジネスマナー集」編集企画プロジェクト編著 ジアース教育新社
- (4) 知的障害支援学校における各教科の具体的な内容の例  
東京都立特別支援学校中学部教育課程編成基準・資料

表 1 : 職業評価基準表①

	1	2	3
<b>基礎的・汎用的能力</b> <b>人間関係形成</b> <b>社会形成能力</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○仕事内容に応じた服装、言葉遣いをする</li> <li>○電話で、仕事や実習に関する簡単な用件を伝えたり、受けたりする。</li> <li>○乳幼児や高齢者に優しく接する。</li> <li>○休憩時間はしっかり守り、それ以外の時間は仕事に集中する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○職場で必要なあいさつや接客用語について知り、練習する。</li> <li>○電話で、仕事や実習に関する用件を伝えたり、受けたりする。</li> <li>○乳幼児の生活や発達などに興味・関心をもつ</li> <li>○地域の式典や祭への参加やマナーについて知る。</li> <li>○地域活動への参加について（防災訓練など）知る。</li> <li>○勤務シフトを練習から雇用、労働制から考える。</li> <li>○休憩時間の過ごし方にもルールがあり、マナーがあることを知る。</li> <li>○同僚への声かけ、先輩後輩のマナー、職場での冠婚葬祭</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○職場で必要なあいさつと接客用語について知り、適切に使えるように練習する。</li> <li>○電話で、仕事や実習に関する用件を正確に伝えたり、受けたりする。</li> <li>○保留などの電話の機能を活用し、必要に応じてメモを取りながら、用件を性格に伝えたり、聞いたりする。</li> <li>○乳幼児の心身の発達を理解したふれ合いやかかわりをもつ</li> <li>○休憩時間は、職場にあった方法でリフレッシュすることの大切さを知る。</li> </ul>
<b>自己理解</b> <b>自己管理能力</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の得意な事に気付くことができる。</li> <li>○氏名や住所、好きなこと、自分のことについて正しく書く。</li> <li>○自分や他人の安全・衛生について気をつけて作業する。</li> <li>○一日の生活に見通しをもち、予定を立てて生活する。</li> <li>○必要な薬を処方どおりに服薬する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自己理解を深める 性格、習性 好きなこと、得意なこと 苦手なこと、不向きなこと 長所、短所</li> <li>○自分の課題書などを手本を見て、書き写す。</li> <li>○安全や衛生に気を配って作業する。</li> <li>○生活時間を考え、時間の有効な使い方を工夫する。家庭で翌日の仕事内容や予定を考慮して就寝する。</li> <li>○簡単な家庭常備薬と家庭看護用品を正しく使う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○過去の実習や作業から自分の能力、適正を正確に把握する。</li> <li>○自分の関心書等、社会生活に必要な諸品げや種々の申込書、申請書などを目的や書式に応じて、適切に書く。</li> <li>○自分や他人の安全で衛生的な環境を確保して、作業をする。</li> <li>○体調管理に気を配るとともに、優れた具合や体調に応じて休養を取り、仕事に影響がでないようにする</li> </ul>

表 2 : 職業評価基準表②

課題対応能力	<p>○ふざけたり、むだ話、よそ見などをしたりしないで最後までする。</p> <p>○道具や機械、材料などの後片付けや整理整頓をする。</p> <p>○仕事や実習について分からないことは、よく聞いてする。</p> <p>○休暇を取ってよい制度（有給休暇）について知る。</p> <p>○値段の高い安いを知り、上手な買い物をする。</p> <p>○簡単な金銭収支を記録する。</p>	<p>○注意事項を守り、作業に集中し、長く作業をする。</p> <p>○道具、機械、材料、製品などの後片付けや管理をきちんとする。</p> <p>○仕事や実習をするとき、分からないことは自ら尋ねる。</p> <p>○簡単なメモを取りながら聞いたり、分からない時は聞き返したりできる。</p> <p>○有給休暇の申請の仕方について、講習を通して、理解する</p> <p>○レシート、領収書などの内容を読み取り、家計簿に記録する。</p> <p>○予算を立てて、計画的に買い物をする。</p> <p>○過去の卒業生の失敗例を知る（携帯電話等）。</p> <p>○労働時間、賃金、休暇などの基本的労働条件について知る。</p> <p>○選挙の意味がだいたい分かり、市町村などの選挙に関心をもち、</p>	<p>○注意事項を守り、作業に集中し、正しく長時間作業をする。</p> <p>○道具、材料、製品を決められた場所の保管したり、機械の管理を正しく行う。</p> <p>○仕事や実習の方法や手順が分からない時は、分からないことははっきりさせて聞く。</p> <p>○必要な場合は、メモを取って、中心的な内容を正しく理解する。</p> <p>○会社の状況を考えながら、有給休暇を取ることについて、理解する。</p> <p>○家計の収支、支出の状況についておおよそを知り、家庭の経済計画に協力する。</p> <p>○予算を立てて生活することの必要性を理解し、計画的に預金、貯金をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎月絶対に必要なお金を知る。</li> <li>・給料明細の見方を知る。</li> <li>・銀行振り込み、自動引き落としについて知る。</li> </ul> <p>○勤務シフト、求職登録の仕方について知る。</p> <p>○携帯電話の決まりやマナーを理解し、それらを守って活用する。</p> <p>○労働時間、賃金、休暇などの基本的労働条件が分かり、選挙選択の参考にする。</p> <p>○職業生活をする上で自動車保険、健康保険、労災保険、年金などが大切であることを知る。</p> <p>○選挙の意味を理解し、市町村や国などの選挙に関心をもち、</p>

表 3 : 職業評価基準表③

<p>キャリアアブラニング 能力</p>	<p>○自分の能力や適正などがある程度分かり、進路について関心をもち、 ○素手検定等の資格や技能検定について知り、関心をもち、 ○公共職業安定所、福祉事務所などの役割と利用の仕方に関心をもち、 ○成年後見制度について知る。</p> <p>○家族や先輩の職業に関心をもち、自分の住んでいる地域にどんな職業があるのかを知る。 ○会社などで働いている人々の様子を見て、卒業後の生活について関心をもち、</p> <p>○いろいろな交通機関の利用について関心をもち ○テレビ、音楽、ゲームなどを家族や友達と一緒に楽しむ ○余暇や休日を楽しみ過ごす。</p>	<p>○クーリングオフについて知る。 ○自分の能力や適正などを理解し、進路について考える。 ○職種によっては資格や免許、役に立つ検定があることを知る ○公共職業安定所、職業センター、福祉事務所などの役割が分かり、利用の手続きや方法に関心をもち ・支援機関やスタッフを調べる ・求人票の見方 ・障害年金、病院の利用の仕方 ○いろいろな職業に関心をもち、知識を深める。</p> <p>○働くことの大切さや楽しさを知り、卒業後の生活について自覚をもつ。 ○さまざまな準備訓練、就労支援制度について知り、就労までの見通しを立てることが出来る。 ○職場までの交通機関の利用の仕方について知る。 ○スポーツ、音楽、飼育・栽培などの趣味をもち、生活を楽しむ。 ○学校の昼休み・休憩時間や休日の過ごし方を知り上手に過ごす。</p>	<p>○自分の個性や能力が発揮できる職業を知り、主体的に進路先を選択する。 ○就労を希望する職種に必要な免許・資格や検定等を知り、取得する。 ○どんなときに公共職業安定所、職業センター、福祉事務所などを利用するかが分かり、実際に利用する。  ○職場には様々な仕事や実習があり、それぞれが関連していることを知る。 ○働くことの意義を自覚し、卒業後（10年後まで）の職業生活に見通しをもつ。  ○職場までの通勤方法や定期券などの購入方法を知る。 ○余暇や休日の計画を立てて、有効に活用する。  ○職場での昼休みや休憩時間の適切な過ごし方を知り、実習先で実践する。</p>
--------------------------	---	---	---

## (10) 道徳研究班

### ア 研究のねらい

今年度より、高等部1・2学年で新教育課程が実施されることとなり、2学年のⅢ課程には道徳の教科が取り入れられた。昨年度までの2年間で、年間指導計画の作成、研究授業による内容の検証を行い、今年度から実際に行われる授業のための準備をしてきた。

そこで今年度は、道徳の授業における評価について考え、授業の中で使うことのできるワークシートの作成をねらいとした。

### イ 研究の内容

- ① ワークシートの内容についての協議
- ② ワークシートの作成
- ③ 授業内容についての検討

### ウ 成果と課題

- ① ワークシートの内容について
  - (ア) 道徳における評価は、数字で判断できるものではなく、学習した内容が実生活においてどれだけ汎化されたかを評価するものだと共通理解し、「自己評価」に焦点を当て、授業の中で記入して使えるワークシートを作成することとした。
  - (イ) 各ワークシートの最後に自己評価の欄を設けることで、生徒が自分自身を評価し、普段の生活を振り返ることができるようにした。
- ② ワークシートの作成
  - (ア) 年間指導計画に沿って、1時間1枚を目安に作成。
  - (イ) 副読本を使用しない題材においては、それに変わるような資料も準備した。
- ③ 今後の課題
  - (ア) 最新の教材の活用
  - (イ) 療育手帳を持つことに抵抗のある生徒への授業作り
  - (ウ) 他校の生徒との関係を築ける強さを育てる支援や指導のあり方
  - (エ) ありのままの自分自身を受け入れ、卒業後に繋げる力の育成

今年度、Ⅲ課程担任が年間指導計画に沿って実際に授業をしてきたが、扱う教材としてはすでに古いと感じるものがあつた。教材については、毎年検討し、最新の教材を使用する必要があると感じた。また、Ⅲ課程の生徒の中には、療育手帳を持つことに抵抗のある生徒もいる。そういった生徒へ対する授業作りについて、今後も検討していきたい。

本校の生徒においては、道徳の指導すべき内容項目「1 主として自分自身に関すること」に重点を置き、在学中に自分自身について考える時間を多く設け、自分を大切にする生き方を身につけてほしいと考えている。

今回作成したワークシートや教材については、Ⅲ課程の生徒だけでなくⅡ課程の生徒にも活用できる内容もあるので、今後利用をしていきたい。

## (11) 作業学習研究班

### ア 研究のねらい

高等部の作業学習においては、その年度毎に生徒一人一人について学習の実態を記録する「作業学習実態票」を作成している。この実態票は、以前のキャリア教育の4領域とその他という5つの視点を大きな括りとし、それを13に分けた項目からなっており、各項目を5段階尺度で実態をとらえるという形式のものである。この実態票は、生徒の実態や作業学習での到達度を見る上で大変有効であったが、キャリア発達の視点として新たな「基礎的・汎用的能力」が示されたこと、また実態を捉える尺度が各項目で文言のばらつき、基準の不揃いがあること等を鑑み、

①実態票の項目をキャリア教育の視点で整理し、さらに到達度(段階)の表現を統一する。

②一人の生徒について、3年間にわたって活用できる実態票を作成する。

③みや中央実態調査と併せて、作業学習の面から教育課程編制に反映させる。

という3点を主なねらいとして本研究を行ってきた。

### イ 研究の内容

① どの作業学習班でも客観的に活用できるように、到達尺度(5段階)を統一

② 以前の作業学習実態票の項目を、キャリア発達の基礎的・汎用的能力に分類

(ア) 資料として、鹿児島県立鹿児島高等特別支援学校で使用している評価表を活用、以前の実態表の項目と併せて分類、整理

(イ) 研究班のメンバー及び、作業学習チーフ等の意見を参考に、本校の生徒の実態や身につけさせたい力等をもとに、評価項目を設定

### ウ 成果と課題

#### ① 成果

(ア) 今回実態票の整理・改訂を行い、現在の作業学習や生徒の実態に合うものを作成することができた。

(イ) 到達尺度を統一することで、各項目の実態把握がより客観的に行うことができるようになり、作業種目が異なっても、生徒の実態を把握することができた。

(ウ) 職員が共通理解することで、職員間では引き継ぎの資料として、保護者に対しては個別面談等で資料として活用することができる。

#### ② 課題

(ア) 新たに作成した様式であるので、今後も検証を継続していくことが大切である。

(イ) 実態票の運用にあたっては、然るべき場において共通理解することが必要であり、今後時期を具体的に設定する必要がある。

(ウ) 現場実習や個別実習における評価表ともリンクさせ、生徒の実態把握や記録として整理する必要がある。

### ※ 参考文献、参考資料

特別支援学校学習指導要領解説編(高等部) 文部科学省

知的障害教育における学習評価の方法と実際

全国特別支援学校知的障害教育校長会

鹿児島県立鹿児島高等特別支援学校公開研究会資料

## (12) 新規作業班 受注研究班

### ア 研究のねらい

新規で発足した作業班であり、年間指導計画①を作成し、目標や学習活動を設定する。年間指導計画②を作成することにより、各作業内容の手順やねらいを明確にする。また、生徒が主体的に活動できるように環境設定を行う。さらに、教材を工夫し生徒が取り組みやすくするとともに、作業の効率化を図る。

### イ 研究の内容

- ① 年間指導計画①・・・ 作業目標、授業の流れの設定  
年間指導計画②・・・ 各作業内容及び指導上の留意点
- ② 環境整備・・・・・・・・ 作業室の構造化
- ③ 教材作成・・・・・・・・ (ア) 百年の孤独のテープ台、型紙  
(イ) スイートアリスろうそく袋、メモ紙用型紙  
(ウ) 風月堂チーズ饅頭折り方手順表  
(エ) きゅうりのシール貼り台紙

### ウ 成果と課題

#### ① 成果

- (ア) 年間指導計画①の作成により学習活動を明確にし、職員も生徒も見通しをもって取り組めるようになった。
- (イ) 年間指導計画②の作成により、指導のポイントを明確にし、職員間で共通理解ができた。
- (ウ) 作業室の構造化により、生徒が主体的に取り組み、準備・片付けがスムーズにできるようになった。また、ビニールカーテンをつけることで衛生的に保たれた。棚の耐震化により安全な環境が整えられた。
- (エ) 教材・教具を工夫することで、生徒が見通しをもって取り組むことが増え、達成感や自己肯定感をもてるようになり積極的になった。

#### ② 課題

- (ア) 作業内容は生徒それぞれの実態に合わせて決定しているが、同じ内容に偏ることが多かった。今後さらに一連の作業内容を細かいステップに分けたり、教材・教具を工夫したりすることにより、いろいろな作業内容に取り組みせる機会を作る必要がある。

(13) 手織り班研究班

ア 研究のねらい

本班では、昨年度を行ってきた縫製班と手織り班を合併した新しい作業班「手織り班」の指導内容の考察、年間計画の作成、施設・設備の検討等を踏まえて、今年度は、実践の中で研究内容の検証を行いながら、生徒の実態に合った効果的な教材作成についても取り組んでいくことにした。

イ 研究の内容

- ① 年間指導計画の見直し  
(施設・設備の検討を含む)
  - ・昨年度作成した年間指導計画の実践、検証
- ② 教材作成

以下の形式で作成					
製品名 例) <span style="border: 1px solid black; border-radius: 5px; padding: 2px;">ぬいぐるみ</span>	出来上がり写真 				
・用意する物	手織り布・・・10cm×20cm 1枚 接着芯・・・10cm×20cm 1枚 ボタン 目用・・・黒 2個				
・型紙実寸大 (別途添付)					
・作り方					
<table border="1"><tr><td>① 工程写真</td><td>_____ ※作り方</td></tr><tr><td>1 </td><td>_____ 留意点</td></tr></table>	① 工程写真	_____ ※作り方	1 	_____ 留意点	
① 工程写真	_____ ※作り方				
1 	_____ 留意点				

ウ 成果と課題

①については、作成した年間指導計画通りにほぼ指導を行うことができたが、昨年度まで縫製班で行ってきた受注製品については取り組むことができなかった。作業班での取り組む内容が多くなったこと、外部からの受注製品に対応できる技術力を身につけさせることが難しかったなどの理由で今年度は、取り組まないと決定したが、今後いろいろなご意見を聞き検討を続けていきたいと思う。

また、施設・設備については見通しがあまく、経糸の整経台が1台しか設置できない、織機を置く場所がないなどの問題が残っている。また、活動場所が2部屋に分かれることで指導者が全体を見通すことができない、生徒の活動の流れが分断されてしまうという状況が出てきた。今後も指導者側の工夫が必要である。

②については、見通しを持って取り組むことができる視覚支援教材を作成することができ、教師が指導する際に有効であったが、生徒が一人で取り組むには、教師と一緒に何度か取り組むことが必要であり、今後も利用しながらよりよい物へとしていくことが大事である。また、生徒の実態も様々であり利用できる生徒は限られてくると考えられる。

(14) 性教育研究班

ア 研究のねらい

昨年度、性教育班では高等部の新教育課程への導入に合わせて、これまでの指導内容を見直し、新教育課程ごとのねらいと指導内容を例示することができた。とくに、重複学級ではこれまで指導内容が固定化していたので、指導内容を細分化することでこれまで取り組んでいなかった内容が明確になるとともに、新しい内容を選択・指導することが容易になった。しかし、いざ授業をするとともに、高等部Ⅰ課程の生徒の実態差の大きさから生じる困難さから、Ⅱ・Ⅲ課程の指導資料（指導案例など）の豊富さから比べるとⅠ課程のそれは少ないのが実状である。そのため、苦勞することも多い。そこで、少しでも高等部Ⅰ課程の授業充実をめざして、本年度はⅠ課程に絞って指導案例を作成することにした。

イ 研究の内容

- ①指導案の形式の検討（統一）
- ②高等部Ⅰ課程の指導項目ごとの指導案の検討と作成  
（分野・項目）

（内容）

自己の性自認	生命に関する側面
	身体的側面
男女の人間関係	
家庭や社会の一員として	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ルール・マナー</li> <li>○家族</li> <li>○エイズ・性感染症</li> <li>○喫煙・飲酒・薬物依存</li> </ul>

ウ 成果と課題

① 成果

- (ア) 昨年の指導内容例をもとに、Ⅰ課程の指導案を作成したことで、Ⅰ課程の生徒の実態に合わせて授業がしやすくなった。また、3分野それぞれから作成したので、指導内容を選択することも容易になった。
- (イ) 指導内容を生徒の身近な出来事や経験等と結びつけたり、ロールプレイ等を取り入れたりする、などの工夫をしたことで、生徒の理解が深まった。

② 課題

- (ア) Ⅰ課程は生徒の実態差が大きく、ある程度対象の生徒をイメージして指導案を作成したが、作成者によって指導内容のレベルに差が生じてしまった。対象生徒の実態をもう少し具体的にする必要があった。また、最終的には個々に応じた個別の指導が必要である。

## 6 研究のまとめと今後の課題

3ヵ年研究の集大成となる今年度は、新教育課程を施行し、授業づくりをゴールとした研究を推進することができた。各教育課程の検証を行い、美術科・音楽科・家庭科・作業学習・職業における評価基準表の作成や、「みや中央実態調査（国語・数学）」の見直し、新設作業班（手織り班・受注班）の年間指導計画の見直しと教材作成及び環境整備、道徳のワークシート集や、性教育の指導案集を作成することができた。

14班の研究班に分かれ、各班を3～6名の職員で構成したことにより、少人数での話し合いができ、教科担任同士や重複学級担任同士での意見交換が積極的に行われ、授業づくりがしやすかった。また、昨年と同様、9月に中間報告会を設定したことで、小グループ間での共通理解を図ることができ、研究に対しての職員全体の意識が高まった。そして、今年度は特に、学部会を最高の意思決定機関とすることが定着し、各研究班で話し合われたことを、学部会で提案し承認される流れが出来上がった。1年間の研究によって、これらの成果が生まれたことは大きな前進であると考えている。生徒一人一人に合わせた効果的な課題別学習の実践につながる指針となっていくと思われる。

ただし、Ⅱ課程の週4.5時間の生活単元学習や、週1時間の自立活動の具体的な運用、今年度作成した評価規準表の検証については引き続き取り組んでいく必要がある。また、各課程をランク付けしない、「上げる」「下げる」等の言葉を使わず、一人一人に合った教育課程と認識することについては、平成24年度に作成した「高等部各教育課程で大切にしたいこと・身につけさせたい力」を前提として、全生徒・保護者・職員が新教育課程についての共通理解を毎年図ることが大切であると考えている。

## 平成26年度 寄宿舎研究班

### 1 研究副題

生活能力を高める支援の在り方はどうあればよいか

「自立に向けての指導」

### 2 副題設定の理由

寄宿舎は昭和46年の開校当初より「日常生活に必要な基本的生活習慣の確立を図り、社会に適応する態度や能力を高める」ことを目標に掲げ、様々な角度から工夫や支援を試みてきた。

現在67名の生徒が在籍しており、生徒の障がい種別や程度が多様化している。そのため、個々の実態や問題点を的確に捉え、学校や保護者との連携や関係機関（医療・福祉）などの協力体制も必要になっている。また、入舎生の約9割が高等部生ということもあり、卒業後の社会参加を目指した支援も重要となってきた。

そこで、基本的生活習慣についての実態を調査し、集団生活をとおして共に生きる力を育む生徒の育成のため、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた支援の在り方について研究を深めていきたいと考え、この副題を設定することにした。

### 3 研究の仮説

一人一人に応じた具体的で継続的な支援の在り方を工夫すれば、自立に向けての基本的な生活習慣の定着とあらゆる生活の場で適応できる力が身に付くであろう。

### 4 研究の方法

平成24年度は生活チェックシートの結果をグラフ化し生徒一人一人の課題を明確にした。その結果をもとに平成25年度は社会に適応する態度や能力の向上を目指し実践を中心とした取組を行った。今年度は「自立に向けての指導」の3年目となり下記のような取組を行った。

- (1) 校内講師による研修により、本校寄宿舎卒業生のインタビューなどから自立に向けての指導についての共通理解を図る。
- (2) 従来使用していた生活指導内容（※1）をもとに寄宿舎生の強みである生活スキルをより伸ばし、弱みを補えるような指導内容を盛り込むなど内容の見直しを行い新たなものを作成する。
- (3) 作成した生活指導内容をもとに毎週月曜日の生活指導の時間（19:00～19:30）を利用して各班（※2）で抽出指導を行う。卒業後、寄宿舎を離れたときに自立した生活が送れるように実技を交えて内容を構成する。
- (4) 各棟（※3）での日々の指導において自立に向けた取組を行う。

※1～寄宿舎内の様々な生活場面において用いられる指導内容集。

※2～本校寄宿舎職員は4つの班に分かれて交代で勤務している。

※3～本校寄宿舎は男子（A2棟、B1棟、C1棟）女子（B2棟、C2棟）の5つの棟で構成されている。

## 5 研究の内容

### (1) 校内講師による研修「卒業生の生活から見える進路支援のヒントについて」

(講師：本校進路指導主事 真田匡業 教諭)

#### ○進路先から求められていること、必要な能力、必要な指導について

「清潔であること」「トイレをきれいに使えること」「食事のマナー」「着替え」「片付け」  
「体調管理」「あいさつ」「責任感」「感情のコントロール」

#### ○寄宿舎卒業生の強み

「洗濯」「布団敷き・たたみ」「配膳・下膳」「当番清掃」「異年齢生徒とのかかわり」

#### ○寄宿舎卒業生の弱み

「寄宿舎の流れから離れたときの弱さ」「誰に尋ねればいいのかわからない」  
「事前準備の意識不足」「金銭管理・金銭感覚」「家庭に戻ったときの生活習慣」

#### ○卒業後就労した生徒のインタビューから浮かんだ課題

「自分で考えないといけないことが増えた」「まだまだ勉強することがいっぱいある」  
「職場での人付き合い」「感情のコントロール」

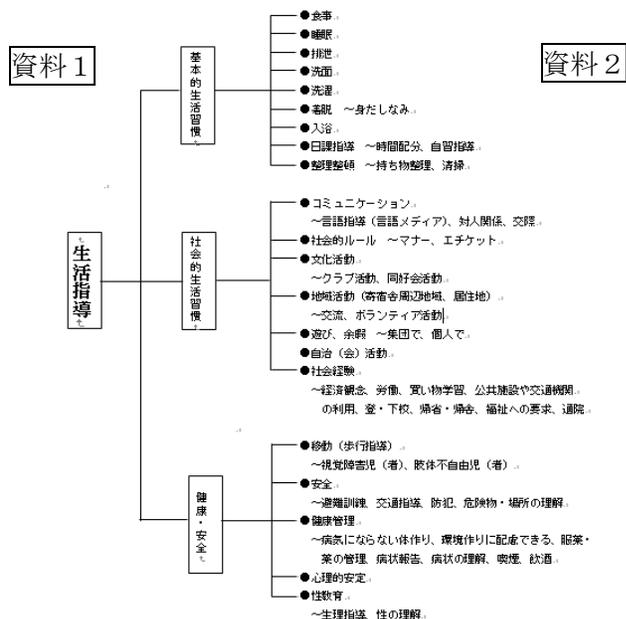
#### ○これからの指導についての提案

「目覚まし時計、スケジュールボード、手帳の活用」「メモを取る習慣をつける」

### (2) 生活指導内容の見直し・作成

#### ○作成にあたってのポイント

- ・従来の指導内容を見直し、現状に沿った追加・変更を行う。
- ・全国寄宿舎教職員大会報告集(資料1)を参考に内容を「基本的生活習慣」「社会的生活習慣」「健康・安全」の3つの領域に分ける。
- ・STEP1を基本の指導内容とし、より高い目標に向けたSTEP2を作成する。(資料2)



	STEP1 <sup>1)</sup>	STEP2 <sup>2)</sup>	
基本的生活習慣	起床・着脱 <sup>3)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・起床の合図で起きる。</li> <li>・起床後、布団等の片付けをする。</li> <li>・寝具のシーツ、カバー類の入れ替えをする。</li> <li>・着脱の準備をする。</li> <li>・静かに休む。</li> <li>・布団を干す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・季節やその日の状況に合わせて寝具を選択する。</li> <li>・目覚まし時計・携帯を使い一人で起きる。</li> </ul>
	身だしなみ <sup>4)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・衣類を着脱する。(ボタン、ファスナー、ホック、ベルト、リボン、靴下、紐等を含む)</li> <li>・人前では着脱しない。</li> <li>・下着が出ないように着用する。</li> <li>・靴・雨靴を履き脱ぐ。</li> <li>・ハンガーを使用する。</li> <li>・ほこりびや汚れた衣類は着用しない。</li> <li>・清潔なハンカチ、ティッシュを使う。</li> <li>・髪を整える。</li> <li>・靴を洗う。</li> <li>・爪を切る。</li> <li>・鼻をかむ。</li> <li>・髭を剃る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目的に合った衣類・靴を着用する。</li> <li>・清潔な衣類を着用する。</li> <li>・アイロンをかける。</li> <li>・下着の色を考慮して着用する。</li> <li>・濡れた靴、傘などの手入れをする。</li> <li>・簡単な衣類の補修をする。</li> <li>・鏡などを使い、身だしなみを整える。</li> <li>・基本的な化粧品の使用法を知る。</li> </ul>
	洗面 <sup>5)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歯磨き粉を適量使う。</li> <li>・歯をきれいに磨く。</li> <li>・うがいをする。</li> <li>・顔を洗い、拭く。</li> <li>・洗面具の後片付けをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歯ブラシを定期的に替える。</li> </ul>
	入浴 <sup>6)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・汚れた物を区別する。</li> <li>・出入りするときに前を隠す。</li> <li>・石けん、シャンプーの加減をし、体全体、頭髪を洗い、拭く。</li> <li>・使用した物の後片付けをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生理時の入浴方法を理解する。</li> <li>・体調に合わせて入浴する。</li> </ul>

### (3) 実践～抽出指導

#### ○目的

各棟での一斉指導では生徒の実態差が大きいと、個々に必要な内容の指導ができていないのが現状である。抽出指導を行うことで生徒の能力に応じた内容の指導を行い、生活能力を高めると共に卒業後の自立した生活に向け意欲や態度の育成を図る。

#### ○実施期間

9月～2月末まで

#### ○対象生徒

高等部2～3年のⅢ課程学級（試行学級を含む。）に在籍している生徒及び卒業後、一般就労やグループホームなどの利用を希望している生徒。

#### ○参加生徒

男子 10名 女子 6名

#### ○参加生徒の目標

- ・時間前に行動する。
- ・準備物や大事なところなどのメモを取る習慣をつける。
- ・始めと終わりのあいさつをする。

#### ○指導について

生活指導内容の3つの領域を各班に割り振り、それぞれ2名で担当した。9/8に参加生徒を集めオリエンテーションを行い、目標や内容などを説明した。生徒に参加意欲をもたせるため、抽出指導の時間のネーミングを生徒から集い「スキルアップトレーニング」と題して指導を行った。また日々の指導に取り入れやすくするため、翌日の引き継ぎ後簡単な報告を行い、月に1回指導内容や生徒の様子についての報告会の時間を設けた。

指導を行った項目とテーマについては下記の通りである。

項目	テーマ
基本的生活習慣	11/11 服装を考えよう（1）
	1/27 服装を考えよう（2）
	2/16 スキルアップをとおして学んだこと
社会的生活習慣	9/29 あいさつからはじめよう
	10/14 時間前行動をしよう
	11/4 伝える力・聴く力
	1/19 携帯電話の適切な利用方法を知ろう
	1/13 計画的にお金を使おう
	2/2 地域との交流をもつ
	2/9 休日を有意義に過ごそう
健康・安全	9/16 危険から逃げよう
	10/6 病気について考えよう
	10/20 好きな人ができたら（男子） 女性の体の仕組み（女子）
	2/25 気持ちを落ち着かせよう

○指導時の留意点

- ・ 道具の準備を当番制にし、役割に対しての責任感をもたせる。
- ・ 出欠表に自分で記入をすることで参加している意識をもたせる。(資料3)
- ・ 最後に振り返りを行い内容の復習をする。(資料4)

資料3

		出欠表 (出…○、欠…×)									
		9月		10月			11月			12月	
		16日	29日	6日	14日	20日	4日	11日	18日	8日	15日
A2		○									
		○									
		○									
B1		○									
		○									

資料4

日付	月	日	曜日
テーマ			
<b>メモ</b>			
-----			
-----			
-----			
-----			
<b>振り返り</b>			
今日はどんな話を聞きましたか？			
←			
←			
今日の話でわからなかったことはありますか？			
←			
←			
気づいたこと、感じたことがあれば書いてください。			
-----			
-----			

○実践例 9月16日(火)

項目	健康・安全
テーマ	危険から逃げよう



### 抽出指導 健康・安全

9月16日(火) 2頁

**知らない場所を知らない!**

- ・知らない場所には緊急に逃げましょう。
- ・扉などは、重い扉等ではふたけて開けません。
- ・階段など、降りやすい場所ではふたけて開けません。

**知らない人についていけない!**

- ・インターネットで知り合った人とは会いません。

**身の回りの道具を安全につかう!**

- ・電線コードやアイロンで火傷をしないように気を付けましょう。
- ・電線網に指を入れて開けません。
- ・はさみ、カッター、釘などを安全に扱います。

**戸締りを確かめる!**

- ・高い扉等にいないときは、かぎも閉めます。

**危険な場所を知る!**

- ・扉が壊れてしまったり逃げ場はありますか？
- ・歩み足に注意はありますか？
- ・自分の身のまわりの危険場所を教えてください。




災害チェックシート	
避難場所 非常用品	 避難所、119番通報センター、避難所 非常用品、避難所に行く交通機関(バス、タクシー、電車) 避難所、避難所へのルート(徒歩、自転車、車)
避難所	 119番、119番、119番、119番、119番
避難所	 119番、119番、119番、119番、119番
非常用品	 非常用品、非常用品、非常用品、非常用品
非常用品	 非常用品、非常用品、非常用品、非常用品
非常用品	 非常用品、非常用品、非常用品、非常用品
その他	 その他、その他、その他、その他、その他



## 資料：抽出指導記録

指導日：9/16（火）	担当者：
項目：健康・安全	テーマ：危険から逃げよう
指導内容：安全について項目ごとに確認、自宅周辺地図を見て避難場所の確認 非常持ち出し袋の中身・準備物の確認	
学習のねらい：安全についての認識、防災意識を高める	

### 学習の流れ

学習活動及び内容	指導上の留意点
<p>○安全について項目ごとに確認</p> <p>○自宅周辺地図を見て避難場所の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時避難場所になりうる可能性のある場所はどこか</li> </ul> <p>→学校、体育館、公民館など</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅周辺地図に避難場所をマーカーする</li> <li>・防災に対してのポイントを話す</li> </ul> <p>→家族で避難場所・経路を確認する</p> <p>緊急時の家族の連絡先を知る</p> <p>○非常持ち出し袋について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・非常持ち出し袋はどういうものか</li> <li>・袋の中に準備するものをチェックシートで確認する</li> <li>・非常持ち出し袋のポイントを話す</li> </ul> <p>○まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・安全についての認識と防災意識をもつ大切さを話す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・声を出して復唱する</li> <li>・身近な例を挙げてわかりやすく説明する</li> <li>・どこが避難場所になるか生徒に挙手で意見をださせる</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地図上で自宅の場所を確認させる</li> <li>・職員の話ばかりではなく避難場所にマーカーさせる作業を入れ、生徒の興味・関心をひく</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料にイラストをいれ、準備するもののイメージがわくようにする</li> <li>・非常持ち出し袋の準備ひとつひとつがなぜ必要かを説明する（用途、使い道）</li> </ul>

### 生徒の反応及び指導中に感じたこと

<ul style="list-style-type: none"> <li>・個々の自宅周辺地図に生徒たちは興味を示していた。</li> <li>・避難場所にマーカーを引く作業をする際には積極的に取り組んでいた。</li> <li>・地図上で自宅を確認する際、自宅の場所がわからない生徒が数名いた。</li> <li>・最後に指導のまとめを話し出した時には生徒たちのほとんどがファイルを閉じ、片付け始めていた。</li> <li>・こちらが用意したメモ用紙に指導中の内容などを書き込む生徒はほとんどいなかった。（書き込んでいたのは女子生徒2名のみ）</li> </ul> <p>→話を聞きながら同時にメモを取るの難しいように感じた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・こちらが投げかけた質問に積極的に挙手があり、答える生徒が多かった。</li> <li>・座席の配置は自由にしていたが、前の席が空いておりばらばらだった。</li> <li>・18:50の開始を予定していたが、食後の入浴や洗濯などが影響し集まりが悪かった。</li> <li>・今回は時間が足りず、できなかったが生徒同士で話し合う時間を設けたかった。</li> </ul>
---

#### (4) 各棟の取組

##### <A2棟>

対象	男子生徒3名
方法	清掃指導
内容	スキルアップトレーニングに参加している生徒を中心に、日課指導の中の「清掃」を取り上げ指導を行った。短時間で終えてしまっていたトイレ清掃の見直しや、ほうきを使用して廊下、階段、玄関の清掃指導に取り組んだ。最初はなかなか難しいようで時間がかかっていたが徐々にきれいにできるようになった。ホース、ほうき、ちりとりなどの道具の使い方を学びながら「においがなくなった」「気持ちがいい」といった生徒からの感想も聞かれ、清掃することの意味を感じることでできる取り組みとなった。

##### <B1棟>

対象	男子生徒3名
方法	ノー声かけデー
内容	スキルアップトレーニングに参加している生徒を対象に、「ノー声かけデー」を実施した。対象の生徒には事前に趣旨を説明しなかったが、スムーズに日課をこなしていた。生徒の中には、時計を気にする様子や他生徒へ指示してくれる場面も見られ、自立した行動をとりつつ下級生の見本となっていた。時計を意識しているうちは声かけできていたが、意識しなくなると日課を忘れ行動が止まる様子が見られた。

##### <C1棟>

対象	男子生徒6名
方法	抽出指導
内容	高3生3名、高1生3名で「ホップ・ステップ・ジャンプ」という全体のスキルアップトレーニングで扱う領域の中で毎週テーマを決めて指導する時間を設けた。また、スキルアップトレーニングで学んだ内容の振り返りも行った。学んだ内容をメモに記録しファイルにとじることにより、いつでも振り返ることができるようにした。 生徒の態度や反応も良く、特に1年生にとっては卒業後の生活には何が必要かを知るいい機会になった。

##### <B2棟>

対象	女子生徒2名
方法	自立部屋
内容	高3生2名を抽出し、10月20日から2週間自立部屋を実施した。卒業を前に自立した生活に向けて最低限自分でできてほしい部分に重点をおいて、何をする時間なのか考えながら行動できるように生活意識を高めさせることを目的とした。個々の実態に合わせて目標を立て職員の声かけなしで日課を過ごし、就床前に1日の振り返りとしてチェックシートを記入させた。

##### <C2棟>

対象	女子生徒3名
方法	スキルアップトレーニングの復習
内容	スキルアップトレーニングで学んだことを定着させるためにどの程度理解できているか確認する振り返りの時間を設けた。「当日の指導内容」「分からなかったこと」「質問したいこと」「今後生かしていきたいこと」を記入させ、個別指導を行い理解を深めさせた。 ニュースを見ることは社会に出たからのコミュニケーションの1つになることを話し、就床前に手話ニュースを視聴させた。関心をもった内容についてまとめて発表をさせ、棟に掲示したことで関心もつことや意識付けにつながった。

## 6 3年間の研究のまとめと課題

### (1) 成果

- 平成24年度の生活チェックシートの作成、グラフ化により個々の課題が明確になり指導目標が設定しやすくなった。平成26年度には3年間使用できるものに変更し推移が分かるようにした。
- 生活指導内容の見直しをしたことにより寄宿舎で何をすべきかを明確にし、職員間の意思統一を図ることができた。
- 平成25、26年度の2年間にわたり、各棟で自立に向けた指導を行った。基本的な生活習慣や生活技術に関すること、また自立部屋など様々な取組をする中でアクションを起こすことが生徒を知ることにつながり指導の手がかりを見つけることができた。指導者が常に意識を持ち生活の流れの中で指導のチャンスを捉えそれらを積み重ねることの大切さを改めて考える機会になった。
- Ⅲ課程の生徒を中心に抽出指導（スキルアップトレーニング）を行った。生徒に分かり易い資料の作成やロールプレイ、実技などを取り入れ計画した。ステップアップした指導内容に生徒も興味を示し意欲的に取り組む姿が見られた。

### (2) 課題

- 生活チェックシートと今年度見直しを行った生活指導内容の摺り合わせをし、「社会的生活習慣」「健康・安全」の領域の項目については再検討していく必要がある。
- 抽出指導については今後も行っていく予定であるが、対象生徒の抽出方法の検討を行い年間をとおして領域別に計画するなど、生徒が見通しをもって参加できるように計画することが必要である。また、抽出指導外の生徒の生活指導の時間（週1回）における取組については今後工夫する必要がある。
- 現在個人目標を設定し指導・支援を行っているが、今後、指導・支援の在り方を明確にした寄宿舎の「個別の生活支援計画」を作成していく必要がある。
- 一人暮らしを疑似体験する取組を「自立部屋」として行ったが、指導の工夫だけでは十分な体験をさせることができなかった。他県の寄宿舎では体験できる部屋（1DK程度）を設置しているところもある。家庭の協力がほとんど得られない生徒も在籍している現状を踏まえると今後このような設備を整えていくことも必要と考える。

3年間の研究の成果をもとに、今後も生徒が楽しく寄宿舎生活を送りながらそれぞれの社会自立に向け「生活する力」を身に付けることができるよう指導・支援をしていきたい。

#### <参考資料>

2003年度 第44回全国寄宿舎教職員大会報告集  
北海道札幌高等養護学校 第11号 研究集録「萌生」

## X 研究のまとめ（平成26年度）

本年度は、『共に生きる力』を育む「授業づくり（支援の在り方の改善）」を主題としつつ、各研究班（小学部、中学部、高等部、寄宿舎）のニーズに合わせた副題を設定したうえで、3年目の研究に取り組んだ。

全体研究・研修では、「共に生きる力」を育むための指導や支援に必要な事項を学ぶことに重点を置いた。あわせて知肢併置校、そしてセンター的機能を果たす特別支援学校として必要な専門的指導力の向上を目的に研修を行った。具体的には、学校全体で研究概要を共通理解した上で班別研究に取り組み、年度末にその成果を報告しあうことができた。そして『文部科学省委託事業「特別支援学校のセンター的機能充実事業（特別支援教育研究セミナー）」』を活用した研修では、校外からの講師による質の高い研修ができた。また職員のニーズに合わせ、校内の人材を活用した研修ができたことも、本校の長所を生かした研修方法として今後につながる実感を得ている。校内外の人材でこれだけ質の高い研修ができることを、幸せに思う。

今年度の取組をそれぞれ検証していく。

まず、前述の『文部科学省委託事業「特別支援学校のセンター的機能充実事業（特別支援教育研究セミナー）」』は、①本校職員の研修と②小中学校等への研修という目的がある。①についてはある程度目的を達成できたが、近年意味合いが強まっている②については、まだまだ反省点は多い。本校のセンター的役割のひとつとしてこの事業が機能するためにも、教育支援部など関係校務分掌部とより一層連携しながら実施していきたい。また、研修内容の選定についても本校の在籍の子どもを考えると①知的障がい②発達障がい③肢体不自由の研修が不可欠である。本校での研修の実施においては、「焦点化」と「均等化」のバランスをとる工夫が必要である。

班別研究では、これまで記載してきたとおり、各研究班（小学部、中学部、高等部、寄宿舎）のニーズにあった研究ができた。どの研究班も限られた時間を有効に活用して研究を行うことができ、研究班の抱えている課題に全職員で向き合い、考えを深めたり、反省したりするよい機会となった。

校内公開授業（オープンクラス）においては、「行ってよかった」との感想が多かったが、反面、全体的には参加者が少なかった。各職員の担当する授業の調整等の課題はあるが、各学部教務と連携を図り、校内で学びあう体制を一層深めていきたい。

また、全体報告会においては、各研究班の取組を聞くことができ、有意義な時間だったとの感想が多かった。会の運営の改善を通して、今後も研究に対する意識の向上を図っていきたい。

この研究は、本年度をもって3年間の区切りを迎える。ここで、今後の研究実践につなげるための課題を明らかにしておきたい。

研究過程の流れを統一することで、ひとつの研究を4つの研究班の取組として行えるよう工夫してきた。しかし、説明や理解が不十分な点もあったので年度当初に再確認と共通理解が必要である。今年度の研究はPDCAサイクルで言えば、実践・改善の段階であった。小学部、中学部、高等部において綿密な計画に基づいた授業実践や評価・改善ができたことは大きな成果である。寄宿舎研究班においても創造性豊かなくつかの支援の実践ができた。これらの成果を活かしながら、次年度以降も日々の実践の中で検証・改善を続けていくことになる。その際に、適切に検証が行われるよう、「共に生きる力」の育成とのつながりが保たれているか、また、今行われていることが研究で取り組んできたことのどの位置にあるのかを常に振り返りながら実践していく必要がある。

そして、研究の推進にあたっては「スクラップ アンド ビルド」と「業務のシステム化」にも努め続ける必要がある。研究の成果が、必ず児童生徒のためのものとなるよう、そして机上の空論とならぬよう、今後も細心の注意をはらっていききたい。

次年度は、より一層の専門性向上に努め、児童生徒一人一人の障がいの実態やニーズに応じたよりきめ細やかで質の高い実践を目指していききたい。また、本校における特別支援教育やキャリア教育の充実を図り、共生社会の実現に向けた本校の役割が果たせるようにしたい。

最後に、本年度の研究にご協力いただいた数多くのすべての皆様に感謝するとともに、本研究の成果が、今後多方面での取組の一助となることを願いたい。

## 【引用・参考文献】

- 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領 平成21年3月告示／文部科学省
- 特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）  
平成21年6月／文部科学省
- 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）  
平成21年6月／文部科学省
- 特別支援学校 教育課程編成資料Q&A 平成23年3月／宮崎県教育委員会 特別支援教育室
- カリキュラム・マネジメントの実施に向けて／茨城県教育研修センター教職教育課
- 児童生徒の学習評価の在り方について（報告）  
平成22年3月24日／中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会

教育課題研究

『共に生きる力』を育む「授業づくり（支援のあり方の改善）」

（平成24年度～平成26年度）

## 研究のまとめ（3年次）

平成27年3月

宮崎県立みやざき中央支援学校

〒880-0121 宮崎県宮崎市大字島之内2100番地

学 校 TEL. (0985) 39-1633

FAX. (0985) 39-6046

寄宿舍 TEL. (0985) 39-1153

<http://cms.miyazaki-c.ed.jp/9932/htdocs/>